ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 56

富山市内石造物等調査報告書

Ⅱ

富山市教育委員会
埋蔵文化財センター

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 56

富山市内石造物等調査報告書
Ⅱ

2013

富山市教育委員会
埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した市内に所在する石造物・木造彫刻あるいはそれらと関連する石造物・木造彫刻の調査・分析等の報告書である。

2　現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

大野　究、尾田武雄、亀田正夫、久々忠義、久保尚文、佐伯巌俊、酒井省三、酒井靖春、西井龍儀、平井一雄、福江　充、藤田富士夫、前田英雄、間野　遼、三浦知徳、安田良栄、米原　寛、布金山西光寺、医王山東薬寺、藤居山富山寺、長栄山宝憧寺、五穀山龍高寺、龍宝山智積寺（南あわじ市）、富山市郷土博物館（順不同、敬称略）

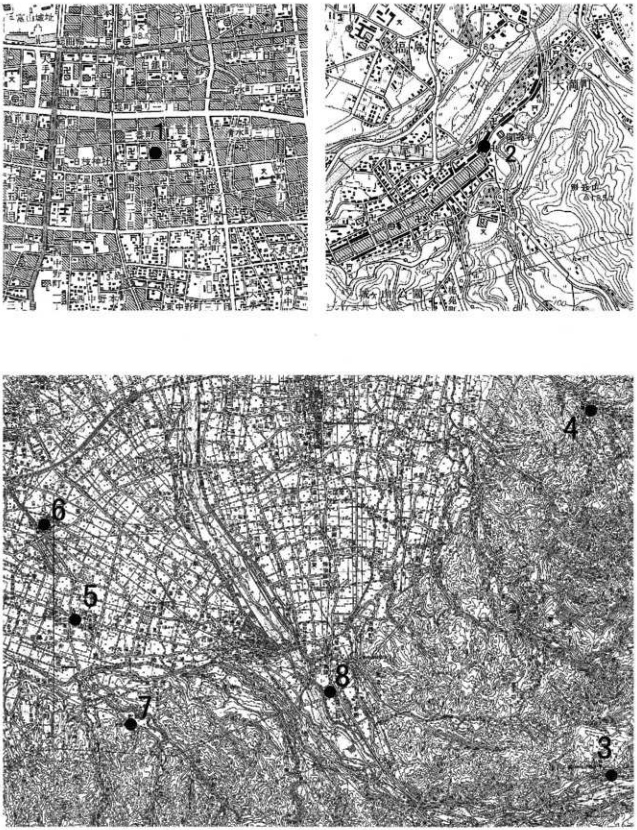
3　本書に掲載した絵図資料の使用については、富山県立図書館の掲載許可を得た。

4　自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を本書に掲載（Ⅱ－1－2）した。

5　本書の執筆は、当センター職員の協力を得て古川知明（埋蔵文化財センター所長）が行った。

目　　次

例言
Ⅰ　石造物調査
1　藤居山富山寺宝篋印塔　4
2　長栄山宝憧寺関連石造物　43
3　大岩山日石寺宝篋印塔　53
4　布金山西光寺境内石造物　67
Ⅱ　木造彫刻調査
1－1　医王山東薬寺蔵獅子狛犬　73
1－2　医王山東薬寺所蔵木造獅子狛犬の自然科学分析　パリノ・サーヴェイ株式会社　78
2　五穀山龍高寺歳岩峅寺衆徒円城坊寺位牌　82
Ⅲ　総括　99



調査位置図

1　藤居山富山寺　2　長栄山宝憧寺　3　立山芦峅寺閻魔堂・教算坊　4　大岩山日石寺
5　布金山西光寺　6　五穀山龍高寺　7　医王山東薬寺　8　岩峅寺円城坊墓地

Ⅰ　市内石造物調査

1　藤居山富山寺宝篋印塔

(1) 調査の目的　解体のための記録調査
(2) 調査日　平成 24（2012）年 6 月 18 日～7 月 13 日
(3) 調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）、坂口諒子（埋蔵文化財センター嘱託学芸員）
(4) 所在地　富山市古鍛冶町 4 番 17 号
(5) 種別　宝篋印塔
(6) 年代　弘化 5（1848）年
(7) 富山寺概要

藤居山富山寺は、富山城下町の古鍛冶町に所在する真言宗の古刹である。山号の藤居は、かつて存在した藤居（藤井）村に由来するとされるが、同所における藤居村の詳細については定かでない。

富山寺の開基は、神亀元（724）年行基によると伝える。大同元（806）年とする説もあるが真偽は不明である（『越登賀三州志』）。

普泉寺縁起(1)に、藤居庄藤居里に藤居山医王院富山寺とあり、明徳年中（1390～94）に寺号を普泉寺と称したと考えられている（『越登賀三州志』）。

万治～寛文期においては富山寺と称した。富山県立図書館蔵『万治年間富山旧市街図』（**図 1**）、同寛文三年『御調理富山絵図』（**図 2**）に掲載がある。当時は西側の南北街路に面しており、西側が正面だったと考えられる。

享保 10（1725）年『寺院御印拝領地等記』(2)には、「普泉寺　九百弐拾五歩」とあり、富山藩から拝領した寺地約 3,058 ㎡のことを書き上げている。万治～寛文期絵図で復元できる寺地は、約 3120 ㎡であり、拝領地面積に近い。江戸期の寺地を復元すると図 2 となる。

天保 2（1831）年富山城下町火災（浜田焼）で本堂は類焼した（3）。

明治 43 年寺号を富山寺と改めた。

本尊は薬師如来で、富山城鎮守山王権現（現日枝神社）の本地仏とされる。

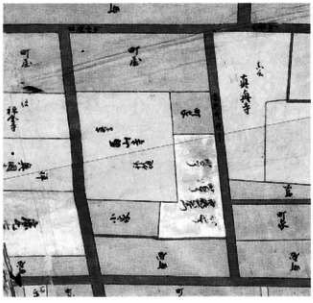


図 1　『万治年間富山旧市街図』（部分）
中央が「富山寺」　富山県立図書館蔵

図 2　寛文六年『御調理富山絵図』（部分）
富山県立図書館蔵

『越登賀三州志』中「医王院」の呼称や、『越中旧事記』中「普泉寺(薬師堂)」の表現から、かつて天台宗寺院であったことも考えうる。

(8) 宝篋印塔本体調査概要

①経緯等

本石塔は、富山寺境内に所在する現本堂の南東側に置かれる。

本石塔は組合せ式の石造塔で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。石塔の表面は、火災の高熱により破損・ひび割れ・剥落が生じている。

石塔は、6月27日解体作業を行った。作業者は、成伯造園（富山市上飯野）による。ひび割れが生じている石材は、ロープやビニール巻針金で固定し、上部の相輪から順次石材毎に解体を開始し、順次下方へ進めた。

基壇内には、古い石塔軸が収められていた。その下には礫石経が敷かれていた。これらの写真を撮影し、取り上げを行った。基壇最下段の下は、割石などが置かれ、安定措置が講じられていた。基壇石材取り上げ後、埋め戻して整地した。6月28日には、埋め戻した地中から基壇内部の石材破片を掘り起こし、補足作業を行った。

解体した石材は富山市婦中埋蔵文化財収蔵庫（富山市笹倉）に運搬し、建物外部に保管した。

②全体概要　本体高さは現状最大338.5cm（11尺1寸7分）である（図8）。

石塔の構成は、上から相輪、笠、塔身（5段）、基礎、基壇（5段）の14段構成である。

基壇5段目は土に埋まり、地面は東から西に傾斜する。基壇部分は西側で12cm、東側で2cm露出

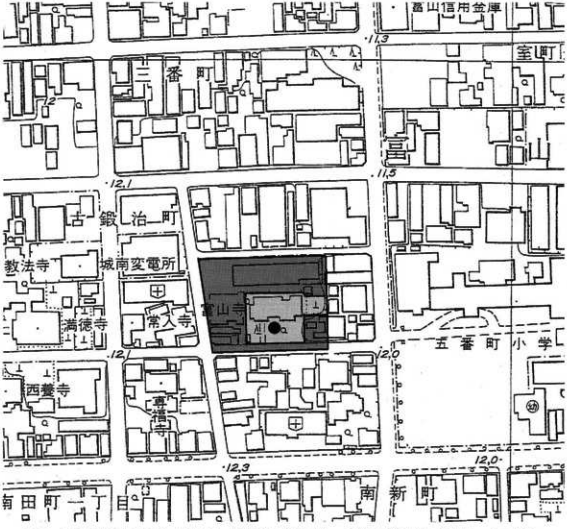


図3　富山寺の現在寺地（網掛）・旧寺地（濃網掛）、宝篋印塔位置（●印）　1:2,000

する。

③相輪　上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢となる。これらは1石で造られ、常願寺川産の立山天狗山石製(4)である。高さ22寸（66.7cm）。

④笠　軒上5段、軒下2段である。隅飾突起は約40°の角度で外側へ広がり、内側は弧状となる。

隅飾突起内外面の文様は、輪郭を巻く弧上端が5つの小さな弧に分けられ、中央に相反する渦が装飾される。内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により細かい凹凸を表現する。

隅飾突起の上面において、先端から内側に1.5寸（4.8cm）入った頂部に、外へ斜め45度傾いた方向で、小穴が穿たれていた。穴は、直径8mm、深さ1.1cmである。このような小穴は、五殺山龍高寺の宝篋印塔（寛政9年）笠にも認められ、これは相輪上部と隅飾突起との間に金属性鎖を渡して装飾するための、輪金具の蛭付穴である〔古川・蓮沼 2009〕。本石塔における金属製装飾品の存在は不明であるが、おそらく付けられていたものであろう。高さ8.5寸（25.8cm）、幅19寸8分（60㎝）。安山岩製。

⑤塔身　5石5段で構成される。上から軸1、反花、軸2、請花、饅頭形となる。

A　軸1　縦横9寸（27.3cm）の方形石で、立山天狗山石製である。4面ともに、花頭形の彫り込みの中に径4.5寸（13.6cm）の月輪が陽刻され、その中に梵字種子が薬研彫で陰刻される。月輪の下には子弁の大きな請花が陽刻される。

4つの梵字種子は、密教でいう金剛界曼荼羅に説く金剛界五仏のうち大日如来を除く四仏を示す。宝篋印塔本体は主尊である大日如来を意味すると理解される。四仏は通常定まった方位に配置される。北面は不空成就如来（梵字種子：アク）東面は阿閦如来（梵字種子：ウーン）、南面は宝生如来（梵字種子：タラーク）、西面は阿弥陀如来（梵字種子：キリーク）である。本塔では、南側の正面にアクがあり、180度反転している。

軸1中央上面には、径1寸（3cm）、深さ1.7寸（5.2cm）の穴が穿たれていた。鉄製心棒を入れるためのものであるが、心棒は存在しなかった。

B　反花　上半は蓮弁、下半は無文で皿状に湾曲する2段構成である。蓮弁の主弁は2段×8葉で、間に間弁を置く。計24弁である。蓮弁の先端は尖って反る。

幅15.5寸（47cm）、蓮弁高さ3寸（9.1cm）、全体高さ4.5寸（13.6cm）である。立山天狗山石製。

表1　富山寺宝篋印塔の規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪	相輪	22	66.7	7	21.2	立山天狗山石	
笠	笠	8.5	25.8	19.8	60	安山岩	軒上5段、軒下2段
塔身	軸1	9	27.3	9	27.3	立山天狗山石	四面に梵字種子
	反花	4.5	13.6	15.5	47	安山岩	
	軸2	11.5	34.8	11.3	34.2	立山天狗山石	正面に梵字シッチリア、3面に銘文
	請花	4.7	14.2	15.5	47	安山岩	
	饅頭形	4.5	13.6	12.5	37.9	立山天狗山石	四面に浮彫文様（巴文）
基礎	反花	3.3	10	18.9	57.2	安山岩	弁二重
	基礎	5.7	17.3	18.9	57.2		四面に浮彫文様（波濤文）
基壇	基壇1	7	21.2	24	72.7	安山岩	1石、4面に刻銘
	基壇2	9	27.3	32.5	98.5	安山岩	板石組、4石、4面に刻銘
	基壇3	9	27.3	39	118.2	安山岩	板石組、4石
	基壇4	9	27.3	45.5	137.9	安山岩	板石組、4石
	基壇5	4	12.1	52.2	158.2	安山岩	板石組、4石
計		111.7	338.5				

C　軸2　高さ 11.5 寸（34.8cm）×横 11.3 寸（34.2cm）の方形石で、立山天狗山石製。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫られる。

正面となる南面には、花頭形に彫り窪めた中央に梵字「シッチリヤ」を陽刻する。シッチリヤは宝篋印陀羅尼経を意味する梵字とされる。彫り窪めた空白部分は、ハツリ整形し凹凸を残す。

左面となる東面には「若有応臨阿鼻／地獄若於此塔／或一礼拝或一／右遶塞地獄門／開菩提門云云」とあり、この文言は、宝篋印陀羅尼経と通称する「一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経」（大正T1022B）の 19. 0713b21 の後半から同 23 先頭までの 28 文字に該当する。これに対し、右面となる西面には「暫来塔影反踏／場艸井摧破惑障／覚悟無明忽入／佛家恣領法財」とあり、これも同 19.0714b24 から同 25 前半の 24 文字である。

裏面となる北面には、梵字 24 文字を陰刻する。これは光明真言陀羅尼である。左上から始まり、右横へ進み、下に下がり左横へ進む順で、5 行にわたる。

反花の下面中央には、鉄製心棒が嵌め込まれていた。下面から下へ突出する長さは 2.5 寸（7.6cm）である。

D　請花　1 石で造る。四隅はすべて欠けており、幅 15.5 寸（47cm）に復元できる。高さ 4.7 寸（14.2cm）。主弁は 2 段×8 葉で、間に間弁を置き、計 24 弁である。蓮弁の先端は丸い。下段弁の中央はくぼむ。立山天狗山石製。

E　饅頭形（敷茄子）　高さ 4.5 寸（13.6cm）、幅 12.5 寸（37.9cm）。立山天狗山石製。平面形は四角形で、側面は楕円形である。側面は、楕円形に浅く彫りくぼめた中央に、六角形を浮き彫りし、中央に二つ巴文を浮彫する。四面ともに同じ文様である。

⑥基礎　基礎は 2 段である。上部の反花とその下の方形石を 1 石で造る。

反花は、主弁が単弁 8 葉×2 段で、間弁をもつ。主弁の弁先端は尖って大きく反る。高さ 3.3 寸（10cm）、幅 18.9 寸（57.2cm）。

基礎方形部には、側面四面ともに波涛文を陽刻する。四面とも意匠が異なり、正面の南面は中央で左右に割れる波頭、東面は、左右端に波頭が分かれる。高さ 5.7 寸（17.3cm）、幅 18.9 寸（57.2cm）。立山天狗山石製。

⑦基壇　5 段からなる。1 段目は 1 石で造る。2 段目から 4 段目は、各段 4 石ずつ、計 12 石の板石を組み合わせる。各段の切石数と幅は次のとおり。

1 段目：1 石　横 2 尺 4 寸（72.7cm）×奥行同寸法、高さ 7 寸（21.2cm）

2 段目：4 石　横 3 尺 2 寸 5 分（98.5cm）、奥行 3 尺 2 寸（97cm）、高さ 9 寸（27.3cm）

3 段目：4 石　横 3 尺 9 寸（118.2cm）、奥行 3 尺 7 寸（103cm）、高さ 9 寸（27.3cm）

4 段目：4 石　横 4 尺 5 寸 5 分（137.9cm）、奥行同寸、高さ 9 寸（27.3cm）

5 段目：4 石　横 5 尺 2 寸 2 分（158.2cm）、奥行 5 尺 2 寸 5 分（159.1cm）、高さ最大 4 寸（12.1cm）

より下は地表面下である。

切石単体の長さは、最小 2 尺 1 寸 5 分（65.1cm）から最大 3 尺 7 寸 5 分（113.6cm）である。小口面は幅 1 尺のものが多い。

基壇表面の整形は、ビシャン叩きにより仕上げられている。表面には籠状の跡が残る。

基壇 4 段目の上面には、計 9 箇所に、径 1.2 寸～2.5 寸、深さ 0.5～1.5 寸の半球形のくぼみが見られる。大きなものは四隅に見られるが、存在箇所は一定ではない。意図して彫り込まれたものかどうかは不明である。

解体の結果、基壇部における切石石材の形状は長方体でなく、基壇各段が重なる部分では、内側が

【1段目 南面】
□□童女
釈尼妙専
実相童子
秋芦童子
道教信士
理貞法尼
釈尼厳浄
法界万霊
□等

【1段目 東面】
源法院
円□院
□林院
□□童女
□慶信士
□道信士
□秀信女
□観童女
□□童子

【1段目 北面】
□照院
理福院
釈尼妙誓
密窓院
□岸院
理□院
梅雲院

【1段目 西面】
□年奉
唱光明
真言百
七十万
遍余矣
予加之
百二十萬
遍□

【2段目 北面】
寛政五年
□密窓士
遺言添興
立天保二
歳府下有
火焼亡了
地思之再
焉弘化五
歳三月建
金岡勝伍
謹誌

【2段目 西面】
石工
見上兵右衛門

基壇1・2段目の銘翻刻　□は未解読

抉られ、全体の平面形状は、隅丸方形となっていた。

したがって個別石材の平面形状はL字形様になり、抉られた部分の幅は、表面に出ている小口面の幅の半分以下の幅となっている。現状で確認できるものは、

3段目小口幅1尺に対し抉り部幅4.5寸（45%）

5段目小口幅1尺1寸に対し抉り部幅5寸（45.4%）　である。

石材は安山岩で、色調は青灰色である。

⑧基壇刻銘　基壇の1・2段目には楷書陰刻による刻銘がみられる。1段目の南・東・北の3面には、戒名（法名）があり、南面7・東面9・北面7の計23人が見える（表2）。

僧籍者は1名おり、「法尼」位である。釈号は3人おり、浄土真宗信徒の家族とみられる。

その他一般信徒の内訳は、院号者9名、信士3名、信女1名、童子・童女6名で、院号者が多い。

今後、過去帳などの記録との照合を行い、これらの法名の人物が、どういった人々であるかを明らかにする作業が必要である（生前法名か、供養者か、法名者間のつながりなどについて等）。

1段目の西面には、8行にわたる文章がある。経文には見あたらないので、作文であろう。主旨は、「□年光明真言を170万遍余り唱えた。予て120万遍を加えたい」ということであろうか。

2段目の北面には、造立の経緯・願主が記される。主意は、「寛政5（1793）年□密窓士が遺言を添えて寺を興した。天保2年城下町の大火で焼亡した。再建の終わった弘化5（1848）年3月この塔を造立した。」というものである。「金岡勝伍」がこの経緯を作文し謹んで記したものである。

天保2年の大火とは、「浜田焼」と呼ばれる天保2年4月12日西田地方で発生した大火で、城下町のほとんどが焼失し、寺社・人家8,300戸余りが被災し、死者70余であった。

2段目の西面には「石工　見上兵右衛門」とあり、製作石工名である。

表2　供養者位号一覧

区分	位号	数	計	割合(%)
僧籍	法尼	1	1	4.3
信徒	院号者	9	19	39.1
	信士	3		13.0
	信女	1		4.3
	童子	3		13.0
	童女	3		13.0
他宗派	釈号	3	3	13.0
計		23	23	

⑨基壇内部の構造　基壇2段目以下は板石組のため、内部は中空である。解体により内部の状況が明らかになった。内部構造は、下部に土を盛って山形にし、その頂上部に礫石経

を撤き、その上に宝篋印塔軸1個を安置していた。

A　宝篋印塔軸

上部の反花と下部の正方体部からなり、1石で造る。立山天狗山石製。高さ 12.75 寸（38.6cm）、幅・奥行とも 10.8 寸（32.7cm）である。反花部は高さ 2.5 寸で、主弁6葉、間弁6葉の計 12 葉である。主弁の蓮弁内側を達磨形に彫下げる。

上面の軸1との接合面は、幅 5mm、高さ 5mm の突起を設け、その内側上面はハツリ整形が顕著である。ここに乗せられていた軸1は、幅・奥行とも 6.7 寸（20.3cm）の大きさに復元できる。

正面（南面）には6文字×5行＝30 字の梵字の陰刻があり、浄土変真言 3 字、光明真言 23 字、破地獄真言 4 文字の順となる。順序は右上から左下へ向かって読む。

西（元来左面）左面には造立年と造立理由が記される。寛政 5 年 1 月に、□□〔判読不明〕が願主となって、密慈院真山道法居士の仏果（現在塔刻銘より、本堂再建を行ったことをいう）を記念して宝篋印塔を造立したという理由が判明する。

東面（元来右面）の文章は、「一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経」（大正 T1022B）の 19.0714b24 から同 25 前半の 24 文字である。

北面（元来裏面）の「光明真言／供養塔婆」は、主願文であり、この石塔の造立目的を示すものである。　この主願文の面は、基壇内部において裏面となっていたが、宝篋印塔が立っていたときには、正面であったと推定される。なお、正面と右面は火熱を受け、剥落・ヒビ等劣化が著しい。

【南面（正面）】
浄土変真言（梵字）―光明真言（梵字）―破地獄真言（梵字）
オン・ボク・ケン―光明真言 23 文字―バッ・タ・ソワ・カ

【西面】
為密慈院真山道法居士仏果也
寛政五癸丑天一月大功徳日
願主　□□

【東面】
暫来塔影反踏場艸推破惑障
覚悟無明忽人佛家愈法財

【北面】
光明真言
供養塔婆

B　礫石経　礫石経は、多数出土した。宝篋印塔軸下の盛土の上に敷かれていたものである。この礫石経に混じって、鉄製クサビ・磁器片・瓦片が出土した。

C　盛土　礫石経の下には、盛土が存在した。

盛土表面には、礫石経に混じって大型の安山岩石片が混在していた。盛土中からは瓦片が出土した。

D　基壇基礎構造　基壇最下段の板石下には、割玉石などの石が置かれ、地中基礎として安定化が図られていた。石には焼土が付着し、また、被熱で剥落したものも認められた。割玉石は神通川産の神通川石である。

⑩石材　石塔部材は安山岩を主要石材としている。安山岩には大別して以下の3種がある。

A：立山天狗山石

B：八川石（大粒の白色長石を含む安山岩）

C：礫が混入する安山岩

塔身より上は主にA、基礎より下はB・Cによる。

Aは常願寺川産の特徴的なもので、常願寺川石工はこの石材を多用する。B・Cの石材は常願寺川産八川石の可能性がある。

⑪補修　各部材は造立当初のものと推定されるが、軸1の方向が異なるほか、相輪と笠がモルタルで接着されるなどしており、補修が行われている。水木住職によれば移転した可能性があるとされる。

(9) 宝篋印塔基壇内部出土礫石経調査概要

①全体概要

宝篋印塔解体に伴い基壇内部から出土した礫石経は、総数697点である。このほか石造物断片1点、熱を受け破砕した礫片が8点ある。

礫石経のうち、墨書による経文が残るものは531点76.2%である。残る166点は、墨書がないか、あるいは消えたものとみられる。

表3 富山寺宝篋印塔内出土礫石経 内訳

区分	内訳	個数	割合(%)
片面墨書	漢字1文字	363	52.1%
	漢字1文字(細く小さい)	53	7.6%
	梵字1文字	89	12.8%
両面墨書	漢字1文字+漢字1文字	19	2.7%
多文字墨書	多文字(法名等)	7	1.0%
墨書なし	墨書がないか、消滅したもの	166	23.8%
計		697	100.0

②経文

経文は、片面のもの、両面のもの、両面と側面のものに大別できる。片面にものには、漢字1字のもの、梵字種子1字のものがある。両面のものは表裏漢字1字のもの、多字のものに分けられる。漢字1字のものには、通常字形のものと、細く小さな字形のものがある。

A 漢字1字

楷書による通常字形で、大きさ1.7～2.9cm程度である。363点があり、礫石経全体の52.1%、墨書のあるもののうち68.3%を占める。

漢字の種類は182種で、「身」が最も多く10個、以下「薩」9個、「法」「無」7個、「為」「観」「人」6個、「音」「尽」「是」「念」5個、「而」「即」「大」「不」4個である。

小字形と共通するものは12種がある。

B 漢字1字小字形

楷書による字形で、53点があり、うち46点が解読可能である。礫石経全体の7.6%、墨書のあるもののうち10%を占める。

通常字形のものより、小さく細い。文字の大きさは1.2～2.1cm程度である。

漢字の種類は39種があり、「嚩」「生」「他」「地」「吽」「其」が2個ずつある。うち通常形と共通するものは12種がある。

C 梵字1字

丸筆体による字形で、89点があり、礫石経全体の12.8%、墨書のあるもののうち16.8%を占める。

文字の大きさは1.2～2.8cm程度であり、片面漢字1字と同じ大きさである。

種類は32種があり、うち記号体は2種がある。ラが7個で最も多く、ハ・マ・バ・ガが4個、カ・サが3個である（不明瞭含む）。

D 漢字1字+漢字1字

楷書による通常字形で、2面に漢字1字が記される。大きさは片面漢字1字と同じである。19点があり、礫石経全体の2.7%、墨書のあるもののうち3.5%を占める。

E 多字

1面もしくは2面及び側面に漢字が3文字以上記されるものである。文字の大きさは大小がある。7点があり、礫石経全体の1%、墨書のあるもののうち1.3%を占める。

③形状・規格

いずれも角のとれた円礫を使用しており、河川敷で採集可能な川原石である。

形状は、大小に関わらず楕円形扁平のものが多く、楕円形で厚みのある卵状のもの、円形扁平のものが主体を占める。この他少数ではあるが複数の平面を有する多面体のものもある。比較的扁平が多

のが主体を占める。この他少数ではあるが複数の平面を有する多面体のものもある。比較的扁平が多いのは墨書するのに容易な川原石を意図的に選択したためと考えられる。

墨書は、石材の平面または平面に近い面を選択して行われている。2 面に行う場合は、それぞれの面が平行であるとは限らない。

規格は、墨書のあるもののうち、最大のものは多文字のもので、縦 8.9cm・横 5.5cm・重量 295 g、最小のものは漢字 1 字のもの縦 2.6cm・横 2.8cm・重量 19 g である。墨書がないものも含めれば、最大のものは縦 9.9cm・横 6.7cm・重量 446 g、最小のものは縦 1.9cm 横 1.9cm・重量 9 g である。
墨書のあるものの形状は、字体を正方向に置いた場合、縦長のものが主体であり、横長のものは約 5% で少ない。

規格の分布についてみると（図 4）、墨書のあるものは縦 2～5cm、横 2～4.2cm が主体であり、全体の平均は縦 3.9cm、横 3.1cm、で縦横比 1.26：1 である。墨書の種類毎にみると、漢字 1 字のものは最小縦 2.6cm 横 2.8cm、最大縦 5.9cm 横 2.6cm、平均縦 4cm 横 3.1cm、縦横比 1.29：1、漢字 1 字小字のものは最小縦 2.5cm 横 3.2cm、最大縦 4.8cm 横 3cm、平均縦 3.6cm 横 2.8cm、縦横比 1.29：1、梵字 1 字のものは最小縦 2.8cm 横 2.7cm、最大縦 4.9cm 横 2.9cm、平均縦 3.7cm 横 3cm、縦横比 1.23：1、両面のものは最小縦 2.8cm 横 2.6cm、最大縦 5.3cm 横 2.7cm、平均縦 4.1cm 横 3.1cm、縦横比 1.32：1 である。多文字のものは最小縦 4.7cm 横 2.3cm、最大縦 8.9cm 横 5.5cm、平均縦 6.8cm 横 4.5cm、縦横比 1.51：1 である。片面両面に限らず、縦平均 4cm 横平均 3cm 縦横比 1.2～1.3：1 の大きさのものが主体を占める。他文字のものは最大・平均ともそれらより大きく、また縦長の傾向にある。

図4 富山寺宝篋印塔礫石経規格(墨書1字)

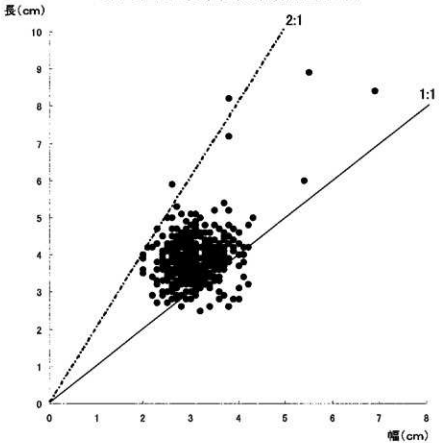


表4 富山寺宝篋印塔礫石経重量分布

重さ(g)	墨書なし	漢字1字	漢字(小)1字	梵字1字	1文字計	漢字1＋漢字1	2文字計	多字	合計
6～10	6	0	0	0	0	0	0	0	0
11～15	13	1	2	1	4	0	0	0	4
16～20	19	8	10	4	22	1	1	0	23
21～25	21	41	22	13	76	2	2	0	78
26～30	24	78	12	14	104	3	3	1	108
31～35	23	85	4	20	109	1	1	0	110
36～40	9	67	0	17	84	6	6	0	90
41～45	15	38	1	12	51	1	1	0	52
46～50	9	19	2	3	24	2	2	0	26
51～55	4	11	0	5	16	1	1	0	17
56～60	1	10	0	0	10	0	0	1	11
61～65	4	3	0	0	3	0	0	0	3
66～70	1	1	0	0	1	1	1	1	3
71～75	1	0	0	0	0	1	1	0	1
76～80	1	0	0	0	0	0	0	0	0
81～85	3	0	0	0	0	0	0	0	0
86～90	1	0	0	0	0	0	0	0	0
91～95	0	0	0	0	0	0	0	0	0
96～100	1	1	0	0	1	0	0	0	1
101～110	1	0	0	0	0	0	0	0	0
111～120	0	0	0	0	0	0	0	1	1
121～130	1	0	0	0	0	0	0	0	0
131～140	1	0	0	0	0	0	0	0	0
141～150	0	0	0	0	0	0	0	0	0
151～200	0	0	0	0	0	0	0	1	1
201～300	3	0	0	0	0	0	0	2	2
301～400	3	0	0	0	0	0	0	0	0
401～500	1	0	0	0	0	0	0	0	0
個数計	166	363	53	89	505	19	19	7	697
平均		35g	25.1g	33.7g					

図5 富山寺宝篋印塔礫石経重量分布

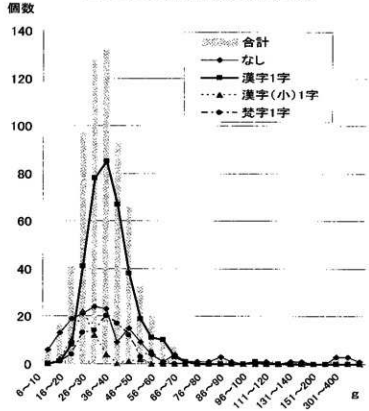
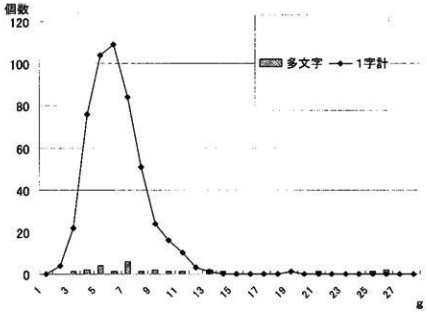


図6 富山寺宝篋印塔礫石経重量分布〔1字対多字〕



重量分布についてみると（表4、図5・6）、墨書のあるものは31～35gが最も多く、21～40gの範囲に72.7%が含まれる。墨書のないものは26～30gが最も多く、11～35gの範囲に60.2%が含まれる。墨書の種類毎にみると、漢字1字のものは15～90gに分布し、平均35g、漢字1字小字のものは15~55gに分布し、平均25g、梵字1字のものは14～55gに分布し、平均33.7gである。両面のものは24～73gに分布し、平均39.7g、多文字のものは26～295gに分布し、平均143.4gである。多文字のものが重く、かつばらつきが大きいといえる。また、漢字1字小字のものがそれ以外に比べ軽く小さい。これらは文字の大小や数と関連するものと考えられる。多数を占める、面に漢字または梵字1字を墨書するものは、35～40gの石を中心に選択されているといえる。

④石材

礫石経に使用している石材には、石灰岩（大理石）・安山岩・立山天狗山石（角閃石安山岩）・花崗岩・閃緑岩・瑕れい岩・片麻岩・凝灰岩・流紋岩・チャート・砂岩がある（図7、表6）。

主体となる石材は安山岩と石灰岩（大理石）であり、この2種で全体の半数を超える61.2%を占める。これは石材の色が白色系統であるため、墨書が顕著に見えるという理由によるものと推定される。同様の視点から、白色または灰色の明るい色彩を呈する石材には、花崗岩・閃緑岩・片麻岩・凝灰岩・流紋岩・チャートがあり、墨書が目立つ石材を選択しているといえる。一方で、暗色系の安山岩、文字の書きにくい多孔質安山岩も少量ではあるが墨書を行っており、必ずしも「白い石」のみを選択しているわけではない。

これらの石材の産出地について検討する。富山・飛騨山地地質図〔小林2000〕によれば、飛騨変成岩類である石灰岩（大理石）を含む地層は、常願寺川左岸上流の支流和田川流域を中心に広域に分布する。このことから、石灰岩（大理石）は常願寺川河川敷において採取されたものと考えられる。現在常願寺川上中流においては砂防ダム等の影響のため石灰岩（大理石）はほとんど採取不可能であるが、それを考慮したとしても江戸後期においてこれらの石材を獲得するためにはかなり歩き回る必要があったと推測される。

図7 富山寺宝篋印塔礫石経石材

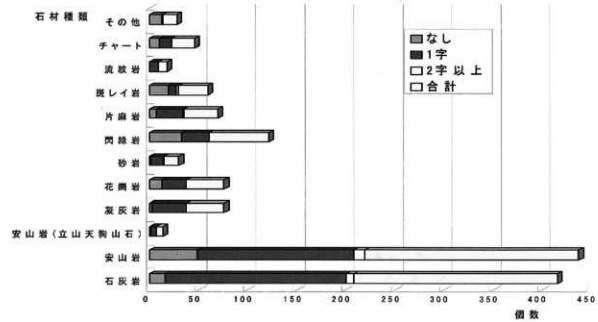


表5 富山寺宝篋印塔礫石経 石材一覧

種類	墨書なし		1文字 漢字1字		漢字(小)1字		梵字1字		小計		2文字以上 漢字1+漢字1	漢字1+梵字1	漢字多字	小計		合計	
石灰岩	16	9.6%	133	36.6%	19	35.8%	32	36.0%	184	36.4%	5	0	3	8	30.8%	208	29.8%
安山岩	49	29.5%	118	32.5%	15	28.3%	26	29.2%	159	31.5%	7	1	3	11	42.3%	219	31.4%
安山岩(立山天狗山石)	2	1%	5	1%	0	0%	0	0%	5	1%	0	0	0	0	0%	7	1%
凝灰岩	3	2%	23	6%	4	8%	7	8%	34	7%	0	0	1	1	4%	38	5%
花崗岩	13	8%	17	5%	5	9%	2	2%	24	5%	1	0	0	1	4%	38	5%
砂岩	1	1%	9	2%	1	2%	3	3%	13	3%	1	0	0	1	4%	15	2%
閃緑岩	33	20%	18	5%	1	2%	9	10%	28	6%	0	0	0	0	0%	61	9%
片麻岩	7	4%	22	6%	1	2%	4	4%	27	5%	1	0	0	1	4%	35	5%
斑レイ岩	19	11%	5	1%	1	2%	2	2%	8	2%	3	0	0	3	12%	30	4%
流紋岩	0	0%	7	2%	2	4%	0	0%	9	2%	0	0	0	0	0%	9	1%
チャート	10	6%	6	2%	4	8%	3	3%	13	3%	0	0	0	0	0%	23	3%
その他	13	8%	0	0%	0	0%	1	1%	1	0%	0	0	0	0	0%	14	2%
計	166		363		53		89		505		18	1	7	26		697	

安山岩は、常願寺川・神通川において採取可能な石材である。このうち角閃石を含む安山岩は、立山連峰中天狗山周辺から産出する特徴的な石材で、「立山天狗山石」と呼ばれている。これらは少数であるが、常願寺川でのみ採取できる石材である。その他の石材についても一般的に常願寺川河川敷において採取可能な在地石材である。

以上のことから、礫石経は、富山寺からやや離れた常願寺川に求めたと考えられる。その理由としては、石塔本体の一部に用いられている立山天狗山石の存在と関連しているであろう。

⑤付着物

礫石経の表面に、コンクリート片が付着するものが3点存在する。これは近年において行われた基壇部分のモルタル固定修理の際、内部にモルタルの一部が流れ込んだためと考えられる。

(9)考察

①富山寺（普泉寺）歴代住職について

普泉寺歴代住職については、度々の焼失のため記録がほとんど残っていない。このため、あわせて境内墓地内住職墓等の現地調査を行い、復元を試みたものが表6である。

墓地には20世以降の墓石が残る。いずれも無縫塔形式で、現住は39世水木真言氏である。

表6　富山寺(普泉寺)歴代住職　　□は読めない文字

世	住職名	位号	忌日					備考
			和暦	西暦	月	日	墓石	
開基	行基							開山(神亀元724年)
20世	秀雄	権大僧都	享保6	1721	3	7	○	当寺中興・墓石半壊
	秀仙	権大僧都法印	享保14	1729	2	3	○	秀聖と併記・1石
	秀堂	権大僧都法印	享保15	1730	9	5	○	秀仙と併記・1石
	覚雄	権大僧都法印	元文3	1738	10	19	○	
	空相?讃	比丘尼	元文4	1738	1	7	○	
	□玄	権大僧都	宝暦2	1752	11	21	○	覚玄?
	寂円	権大僧都法印	文化2	1805	2	7	○	
32	栄道	権大僧都法印	文化8	1811	11	24	○	
	栄徒	阿闍梨	文化9	1812	2	11	○	栄道法印弟子。大法師栄深併記
33	随応	法印・大和上	文政13	1830	6	8	○	
	照海	阿闍梨	嘉永7	1854	4	17	○	
35	慈海	法印	明治元	1868	7	朔	○	
36	恵海		明治28	1895	1		○	
37	浄範		昭和11	1936	2	15	○	
	実範		昭和12	1937	3	27		浄範墓石裏に追刻
38	瑞見	中僧正	昭和58	1983			○	
39	水木真言	(現住)						
【年代不明】								
	秀寛	法印					○	
	祐宝	(権大僧)都法印					○	住職墓石
	智海	大法師					○	
	心海	法師					○	
	秀栄	阿闍梨					○	泰範と併記
	泰範	法師					○	秀栄と併記
	不明	権(大僧都?)					○	住職墓石
	栄深	大法師					○	栄徒に併記

②富山寺における新旧宝篋印塔造立の背景について

本石塔が造立された経緯は、基壇2段目東面の銘文により判明する。

銘文の前半には、富山寺創建あるいは中興が寛政5年で、中興者は□密窓士である、その後天保2年に本堂は焼失し、弘化5年再興されたことを記す。この石塔は、本堂が再興したことを記念して奉納されたものとみられる。この経緯を識誌した金岡勝伍の妻性は不明であるが、有力な富山寺信徒であったとみられる。基壇に記された23人の法名は、有力な信徒である院号者を中心に、他宗派信徒も含めた有力信徒とその家族と考えられ、これらの人々が石塔造立、ひいては本堂再建における財政有力支援者であったろうと思われる。なかでも金岡氏がその代表であったのかもしれない。

饅頭形の中央に彫られた巴文は家紋とみられる。家紋の分類では、「亀甲に右二つ巴」となる。金岡家の家紋あるいは弘化5年当時富山寺住職もしくはその関係者の家紋と思われる。

解体に伴い、基壇内部の空間には旧宝篋印塔の軸部（軸2に相当）が安置されていたことが判明した。この軸部の銘文情報から、旧宝篋印塔は、密窓院真山道法居士の供養のため、願主（氏名不明）が寛政5年1月造立したことが明らかになった。現在宝篋印塔の基壇2段目の刻銘によれば、「寛政5年□密窓士が遺言を添えて寺を興した。」とあり、この「□密窓士」とは今回検出した軸の刻銘にある「密窓院真山道法居士」と同一人物とみられる。この密窓院真山道法居士は、過去帳に見えず、居士の位号からみて、住職ではなく、有力信徒とみられる。

これらの情報から、密窓院真山道法居士は、寛政5年1月死去する前に、本堂を再興するための多額の資金を寄進することを遺言した人物で、その寄進に基づき本堂が再興されたことを記念し、宝篋印塔が造立されたことがわかる。その後、「浜田焼」と呼ばれる天保2年4月12日の大火により再興した本堂が焼失したが、再建されたのは弘化5年であり、その3月再建を記念して現在の宝篋印塔が造立された。宝篋印塔がもう1基造立されることとなったのは、おそらく浜田焼の大火で宝篋印塔に被害が生じ、取替が必要となったのであろう。このため、新塔造立に当たっては、旧塔の経緯を記してある軸2を、寺の再興に尽力のあった密窓院真山道法居士を顕彰する記念として、新塔の基壇内に安置したと考えられる。

この旧塔軸2は、旧状において、正面と右側面が火熱を受けている。したがって、この旧塔が立っていた旧状において、塔に向かって右側手前に門あるいは本堂等の木造建築物が所在し、その火災の影響を大きく受けたものと考えられる。旧塔が所在した当時の絵図によると、普泉寺の入口は西であり、本堂正面も西を向いていたと推定される。現在は南向きであり、90度ずれている。旧塔が当時どこに所在していたか知る情報はないが、本堂の西側にあった場合は、正面を東に向け、本堂の東側にあった場合は、正面を北に向けていたと推定される。

また石塔解体により、現宝篋印塔の造立経緯が明らかになった。これまで現宝篋印塔は別の位置に当初造立され、ここに移転したものと推定していたが、旧塔が解体されるに際し、その部材である軸2一石と、旧塔基壇内に埋納されていた礫石経を新塔内に安置し直したと考えられる。

この意味で、宝篋印塔内部出土の旧塔軸2と礫石経は、富山寺の変遷を知る上で重要な資料と位置づけることができる。今後、本寺と関係を持っていたであろう密窓院真山道法居士の由緒を確認する必要がある。密窓院真山道法居士を顕彰して造立された寛政5年の宝篋印塔旧塔は、32世栄道代と思われるが、その先代の可能性もある。栄道は文化8（1811）年没で、造立はその18年前である。新塔の造立は、34世と推定される照海代である。照海は嘉永6（1853）年没で、石塔の造立は死去の6年前である。

本石塔は、富山寺再建の経緯とそれを記念して有力信徒による寄進によって造立されたものであり、富山寺にとって歴史的価値の高い遺物といえる。

③石工見上兵右衛門について

見上兵右衛門は、木石塔を製作した石工の名前である。三上と表記することもある。

兵右衛門の製作品は、文政元（1818）年から嘉永5年まで35年間確認できる。所在地はすべて富山城下町内であり、製作した種類は題目塔・宝篋印塔・狛犬がある。工房所在地は不明。

本寺の宝篋印塔は、兵右衛門唯一の宝篋印塔で、製作期間後期における代表作といえる。

兵右衛門作狛犬の盤台文様には波濤文浮彫が用いられている。この文様は常願寺川左岸中流域には形成された常願寺川石工集団特有の文様要素であり、兵右衛門が常願寺川石工とのつながりを持つ、具体的には常願寺川石工のもとで修業したと考えられる。このことは、本石塔の石材に常願寺川産角閃石安山岩が多く使われていることからも追認できる。

④礫石経に書写された経文等について

礫石経とは、小形の河原石の表面に、墨で経文等を書き、容器に入れるなどして埋納されたもので、平安時代以降供養等の一形式として行われた作法である。礫石経の埋納は、中世以降、経塚築造・地鎮・鎮壇等に伴って行われ、近世期においては、法華経などを1つの石に1字ずつ書写した、いわゆる一字一石経による経典書写供養が民間信仰として広く普及し、「一字一石経」などの刻字のある石標を立てる例も多く見受けられる。このほか密教寺院を中心に、宝篋印塔基壇に礫石経を納める例が少

なからず報告されているが、その詳細を考古学的に分析等した事例はまだ少なく、基壇への収納方法や礫石経の分類分析や出典解明等の重要な様相についてはほとんどが不明である。

富山県内における近世期造立宝篋印塔祭式について、これまで筆者らは、真言宗寺院の医王山東薬寺・五穀山龍高寺・北叡山各願寺等において検証し、宝篋印陀羅尼経の趣意に基づく石塔造立（特に軸における経文引用）及び宝篋印陀羅尼を書写した礫石経の納置という共通した様相を確認した。後段においてこれらと本寺の礫石経について比較する。

本寺宝篋印塔基壇内部から出土した礫石経に墨書された経文は、大別して、漢字と梵字がある。それぞれについて引用した経典等を検討する。

A　漢字

経文については、本石塔軸2に刻銘された通称「宝篋印陀羅尼経」（「一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経」大正蔵 T1022B）及び寛政9年五穀山龍高寺宝篋印塔・文化4年医王山東薬寺宝篋印塔に収められた経文に使用されている同経の存在を参考にすると、本礫石経の漢字は、ほとんどが宝篋印陀羅尼経と共通することから、同経文を書写したとみられる。

ただし、同経文にない漢字が38字存在している。これらのうち、26字は通称「法華経」（「妙法蓮華経」大正蔵 T0262）に掲載がある。残る12字は、「宝篋印陀羅尼経」「法華経」の両方ともに認められない。このうち、法華経と同類の「正法華経」（大正蔵 T0263）には3字、「仏説法華三昧経」（大正蔵 T0269）に2字が含まれる。それ以外の7字は不明である。また、「法華経」に含まれず「宝篋印陀羅尼経」に見える漢字が13字存在する。

以上により、礫石経の経文は、「宝篋印陀羅尼経」「法華経」及びその関連経文が引用され書写されたものと考えられる。

B　梵字

梵字には光明真言と仏を表す種子がある。

光明真言梵字23字のうち、13字が確認できる。光明真言梵字は、本石塔基壇内に納められた旧塔軸に引用されている。このほか梵字種子には以下のものがある。

金剛薩埵・五秘密菩薩を表す種子のサトバン

宝篋印陀羅尼経を示すシッチリア

金剛頂経釈字母品の重字「乞叉」で、「尽」を意味するキシャ

シッチリアは、本石塔とそれに納めるべき宝篋印陀羅尼経経文のことを意味する梵字種子である。

C　多字の示す内容

多字の内容については、以下の種類がある。

a　「南無」で始まる名号等

「南無釈迦牟尼如来」（No.1）　釈迦如来仏に対する名号

「南無帰依仏」（No.4）　帰依する仏に対する名号

「南無大師遍照金剛」＋梵字バン（No.7）　弘法大師に対する宝号とその梵字種子

「南無地蔵大菩薩」＋梵字ア（No.7）　地蔵菩薩に対する名号と胎蔵界大日如来の梵字種子

「南無□□□」（No.7）＋梵字ア＋法名？

b　供養者を示す法名等

「智法童女」（No.2）

「為母」（No.3）

「西蓮□士」（No.5）

「和山宗之信女」「心月智浄信女」（No.6）

梵字ア＋「秋音□□」（No.7）

c　光明真言を書くもの

光明真言漢字 27 字（No.7）

光明真言の通常漢字表記は、「唵阿謨伽尾盧左曩摩訶母捺囉麼抳鉢納麼入嚩攞鉢囉㗚哆野吽」であるが、No.7 礫石経では、10 字目の「訶」をカタカナの「カ」、25 字目の「哆」を「多」と表記している。

⑤礫石経の書写者について

礫石経を書写した人物は、楷書の漢字・丸筆形の梵字を、経典使用文字に従い誤りなく書いており、また丁寧で達筆である。楷書の漢字は、1,2 文字のものについてみると、字体の特徴からみて大きく 2 つに分けることができる。

A　小字形のものに用いられる文字を主とするもの

細い字で書くもので、整った楷書である。特徴は次のとおりである。

「日」などの中横線の終点は、右縦線に付けない。

横線の始点は、細く縦に下げてから、横に引く。

跳ねは、鋭角に斜め上向きにし、長い。

縦線と横線の太さの差が少ない。

B　1，2 文字のものに用いられる文字を主とするもの

大きく太い字で書くもので、やや縦長に間延びした字形の楷書である。特徴は次のとおりである。

縦線の始点は、しっかり押さえて入る。

跳ねは、横向きかやや斜め上向きで、短い。

横線に比べ、縦線が太い。

偏や旁は、やや離れ、字のバランスを欠く。

以上の大きな差異を認めることから、2 人の書写者の存在が推定できる。ただし、B においては、横線を左に長く延ばす例がいくつか認められるので、2 人の書写者がいる可能性が高い。

以上により、書写者は、少なくとも 3 人の存在が推定できる。

梵字種子の書写者は、比較資料がないが、B の書写者と推定される。

多字の書写者については、No.4 と No.7 は A の書写者、それ以外は B の書写者と推定される。多字 No.7 は、梵字と大小の文字が混在するケースであるが、梵字種子は、B と推定した 1・2 字の梵字種子と形態が異なり、細く崩れた字形である。また、供養者の大きい字形部分であっても、比較的細い線で書いており、これも B の特徴と異なっている。

⑦礫石経に書かれた供養者情報と石塔造立について

多字礫石経（No.2,5,6）には、少なくとも 4 人の法名が確認できる。これらは、宝篋印塔造立に関わりの深い願主が、供養の対象とした供養者と考えられる。本寺に所在する過去帳記載情報を引用して検討する。

「智法童女」は、当寺過去帳に見え、四方町内山家の家系に記載があり、没年は文化 9 年 10 月 5 日である。位号が童女であることから満 18 歳未満で死亡している。過去帳の同家欄には、文化 4 年没の「智空妙幻信女」がおり、同じ智の字を使っていることから親子関係にあると推定される。この内山家の由来は不明である。

「心月智浄信女」は、当寺過去帳に「心月智浄信士」と見え、これが同一人物とみられる。「元大江村宗右衛門事　大郷嘉平」の家系に記載があり、没年は文化 3 年 12 月 1 日である。大江村とは現射

水市大江（旧小杉町）である。信女が信士と異なっているのは、明治期以降の再作成の際誤記されたものと推定される。

「和山宗史信女」は過去帳に見えないが、心月智浄信士と表裏一対で書かれていることから、2 人は夫婦または肉親の関係が推定される。

「西蓮口士」の不明文字は「信」でないようだが、法名とみられるが、過去帳には見えない。

智法童女・心月智浄信女の礫石経の存在により、この礫石経は、文化 9 年 10 月以降に作成・塔内に納入されたと考えられる。石塔本体の造立経過とあわせると、納入時期は再建された弘化 5 年と推定することが妥当である。ただし、再建された本宝篋印塔には見えないが、その他の宝篋印塔には、基壇等に礫石経を投入できる投入口が設けられているものが多いことから、旧石塔にそのような投入口が設けられていた場合には、文化 13 年からそれほど経過しない時期に塔内に投入することは可能である。

以上により、4 人に対する供養は、文化 9 年 10 月以降、あるいは弘化 5 年の再建時に礫石経を塔内に納める形で行なわれたと考えておく。

⑧本堂保管の礫石経について

これまで本堂に礫石経が 2 点保存されていた。

A　長さ 5.5cm、幅 4.4cm、厚さ 4.1cm の球状の河川転石。立山天狗山石。重量 139g。表面および裏面の中央に梵字種子 1 字が各々墨書されている。「バン」（金剛界大日如来）・「アー」（胎蔵界大日如来）である。

B　長さ 7.3cm、幅 5.4cm、厚さ 3.5cm の球状の河川転石。立山天狗山石。重量 204g。表面に付着物があり、墨書の有無は不明。顕著な墨書は見えないが、礫石経としておく。

これらの属性について、塔内出土の礫石経と比較すると、次のとおりである。

宝篋印塔基壇内部の礫石経に両面梵字のものは認められない。

大きさは、多字の最大より小さいが、1 字の規格より大きい。

扁平な面がなく、厚みがある球形で、形状が異なる。

梵字の大きさが大きく、1 字の最大長を超える。

梵字の書体が異なり、かつ太い。

以上 5 点の相違が認められることから、本堂保管の礫石経は、本石塔に納められた礫石経の一部ではなく、別の理由によりもたらされたものと考えられる。

⑨富山県内における宝篋印塔祭祀・礫石経と富山寺の宝篋印塔祭祀・礫石経

宝篋印塔の名称の起こりは、宝篋印陀羅尼経の名称が起源とされている〔日野 1976〕。元来は石塔に納められるべき経典は宝篋印陀羅尼経であるという前提が成り立つべきである。

中世～近世期における宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経の関係を石塔銘文から検討した研究として、三木治子による研究がある〔三木 1998・1999〕。中世期には、宝篋印陀羅尼経を銘文とするものは 2 例にすぎず、ほとんどが法華経であり、造塔行為と信仰形態が合致しないとされる。一方近世においては、宝篋印陀羅尼経を塔の銘文として引用するものは梵字表記を含め 23 例があり、ほかに多層塔に納められたとみられる宝篋印陀羅尼を書いた礫石経出土例が 1 例報告されている。後者は安永 7（1778）年造立で、礫には表裏に 1 字ずつ梵字を記すものが主体である。これらの例でも宝篋印塔銘文・礫石経ともに宝篋印陀羅尼である例はほとんど見当たらない。

富山県内の真言宗寺院においては、東薬寺や龍高寺例などで明らかになったように、18 世紀後半から 19 世紀前半頃を中心とした宝篋印塔造立にあたり、宝篋印塔の本来的意味である宝篋印陀羅尼の

書写納入及び塔身における宝篋印陀羅尼経文の刻銘による供養祭祀が行われている。旧来の銘文研究ではこのような石塔における宝篋印陀羅尼経の引用例が江戸期に増加している傾向は指摘されつつも、それが中世から継続する中で全国的に回帰的変容を遂げた形態なのか、それとも特定地域あるいは特定宗派における一時的・限定的な現象であるのか、さらにその変容の理由などについては不明のままであり、東薬寺宝篋印塔例の検出が、今後解明すべき課題を示したといえる。

塔内部あるいは塔下から礫石経が出土した事例について検討し、本寺と比較する。確実な出土事例は、医王山東薬寺、五穀山龍高寺がある。

A　東薬寺〔古川・伊集 2008〕

文化4年信徒寄進の小型宝篋印塔の直下から、大甕に埋納した礫石経1,133個が出土した。このうち502個に墨書が認められた。判読できた例からみて、墨書の種類は3通りがあり、

A類　1面は文字、もう1面は梵字種子

B類　1面は文字、もう1面は文字＋梵字種子

C類　2面とも梵字種子

であった。文字は、多字であり、多くは宝篋印陀羅尼経の経文の引用である。梵字種子は、ボロンが80%以上を占める。ボロンは、一字金輪仏頂の意味であるが、別に宝篋印陀羅尼経の意味があり、ここでは後者の意味で書かれたと推定される。

石材は石灰岩（大理石）が主石材であり、30%を占める。次いで花崗岩・閃緑岩が多い。これらの石材は、いずれも常願寺川流域で獲得できるものである。石の形状は、角のとれた円礫・亜角礫を主体とする。

B　龍高寺〔古川・蓮沼 2009〕

寛政9年に、60世堯教住職により宝篋印塔が造立された。基壇3段の周囲に四国八十八ヶ寺本尊の像形を浮彫するという、きわめて稀な形態の宝篋印塔である。

解体修理の際基壇内部から大量の礫石経が出土したが、一部を残してほとんどが埋め戻されたという。本堂床下に墨書のある39石が残されており、その内訳は、

A類　文字（5～45文字の多字）33石

B類　梵字種子（1～2字）　6石

であった。文字は2～5面に書き、宝篋印陀羅尼経の経文の引用である。梵字種子は聖観音等である。文字と梵字種子を組み合わせるものはない。

石材は花崗岩が多く、石灰岩（大理石）は見えない。石の形状は、河川で採取できる角の取れた亜円礫が主体で、ほかに平たい円礫がある。

宮山寺宝篋印塔内部から出土した礫石経の様相は、1，2字の漢字によるものが主体であり、宝篋印陀羅尼経及び法華経の経文の引用である。梵字は、仏を表す梵字種子があるが少なく、光明真言梵字が多い。多字のものは、法名や名号が書かれており、1，2字の漢字・梵字の礫石経とは性格が異なるといえる。石材は石灰岩（大理石）と安山岩が主石材であり、石の形状は、河川で採取できる扁平な円礫を主体とする。

以上の様相を東薬寺・龍高寺と比較すると、東薬寺は梵字種子のボロンが主体、龍高寺は漢字多字の経文が主体、本寺は漢字1字の経文が主体とそれぞれ異なる。経文は、3寺ともに宝篋印陀羅尼経を主体とする。東薬寺・龍高寺ではそれ以外の経は少ないか全くないのに比べ、本寺では法華経関係の経文が少なからず使用されていると推定され、引用経文の様相がやや異なっている。また、石材についてみると、常願寺川で採取可能な石灰岩（大理石）を多く使う様相は、東薬寺と共通しているが、

石材形状は東薬寺・龍高寺が亜角礫が多いのに比べ、本寺では円礫が多く亜角礫は少ない。このことは、東薬寺と同じ常願寺川を石材採取地としながら、東薬寺の採取地よりも下流側において採取されたことを意味すると考えられる。

以上のことから、真言宗寺院における宝篋印塔祭祀は、宝篋印陀羅尼経文を書写するという共通性を有しながらも、個別の礫石経に書写する内容は、寺院毎に違いがあったということがわかる。この差異の要因は不明であるが、いずれにも寺院住職が関わっていることから、住職による宝篋印塔祭祀への理解や、造立目的の違い等が反映していると推測されるものの、明確でない。今後の資料の蓄積による解明を目指す必要があろう。

富山寺史と石塔

西暦	和暦	住職	できごと	史料
1721	享保6	秀雄没		
1725	享保10		拝領地925歩(約3,058㎡)	「寺院御印拝領地等記」
1738	元文3	覚雄没		
1793	寛政5		本堂再建・宝篋印塔造立	
1811	文化8	32世栄道没		
1829	文政12	33世純応没		
1831	天保2		本堂焼失	
1848	弘化5		本堂再建・新宝篋印塔造立	
1853	嘉永6	34世照海？没		
1868	明治元	35世慈海没		

注

1　縁起に相当するものは現存しない。

2　加越能文庫（金沢市立玉川図書館蔵）　翻刻は『特別展　お殿さまとお寺―富山前田家ゆかりの寺々』掲載

3　「天保二年四月富山町火災書上」『富山県史』史料編Ⅴ近世下（富山藩）989号文書

4　常願寺川産の角閃石安山岩を立山天狗山石と呼称する提案が2012年第13回石造物研究会富山大会でなされた。その詳細は『北陸の石造物―研究の現状と課題―』石造物研究会に掲載。

引用・参考文献

小林武彦編 2000『大地をさぐる―富山と飛騨山地―』ダイチ株式会社

高瀬重雄監修 1994『日本歴史地名大系第16巻　富山県の地名』平凡社

日野一郎 1976「Ⅲ石塔」石田茂作監修『新版仏教考古学講座』第三巻塔・塔婆　雄山閣

古川知明・伊集守道 2008「医王山東薬寺の文化四年銘宝篋印塔下の埋納礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第27号

古川知明・蓮沼優介 2009「五袋山龍高寺宝篋印塔と礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第28号

古川知明 2012「富山県東部における近世石造物研究」『北陸の石造物―研究の現状と課題―』石造物研究会

三木治子「石造宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経(3)」『歴史考古学』第42号 1998、

三木治子「石造宝篋印塔と宝篋印陀羅尼経(4)」『歴史考古学』第44号 1999

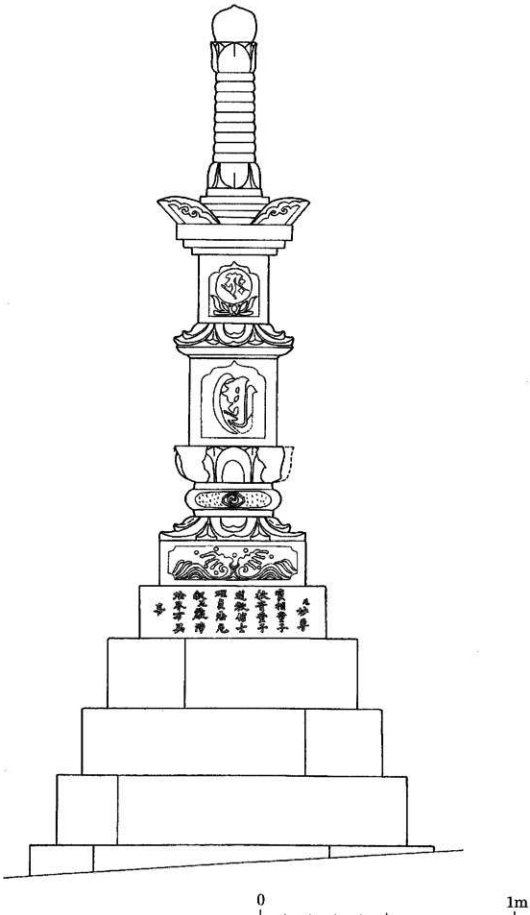


図8　富山寺宝篋印塔実測図

軸２　正面陽刻
梵字種子シッチリア

軸２　東面　宝篋印陀羅尼経文陰刻

軸２　西面　宝篋印陀羅尼経文陰刻

軸２　北面　光明真言梵字陰刻

北面における光明真言梵字の順序

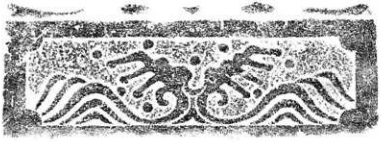
(開始)
オン → ア → ボ → キャ → ベイ
↓
カ ← マ ← ナウ ← シャ ← ロ
↓
ボ → ダラ → マ → ニ → ハン
↓
バ ← ハラ ← ラ ← ジンバ ← ドマ
↓
リタ → ヤ → ウン → 休止符

0　10cm

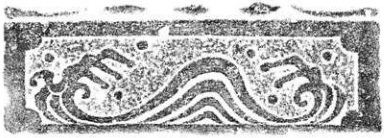
軸１　梵字種子アク　南面（元来は北面）

0　10cm

饅頭形（敷茄子）南面



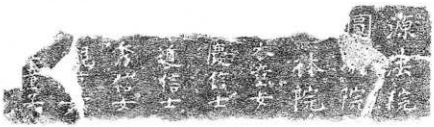
基礎　波涛文　南面



基礎　波涛文　東面

0　10cm

基壇１段目　刻銘（戒名）　南面



基壇１段目　刻銘（戒名）　東面

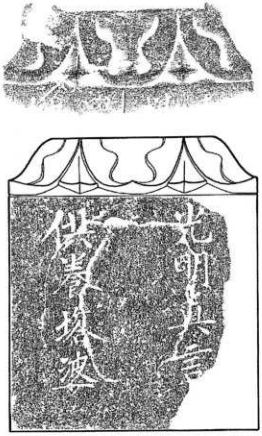
基壇１段目　刻銘（戒名）
北面

基壇１段目　刻銘（願文）　西面

基壇２段目　刻銘（経緯）　北面

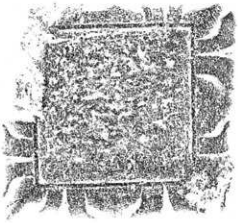
0　10　20cm

基壇　石工銘



旧塔軸２　（旧正面）

0　10　20cm



旧塔軸２　上面

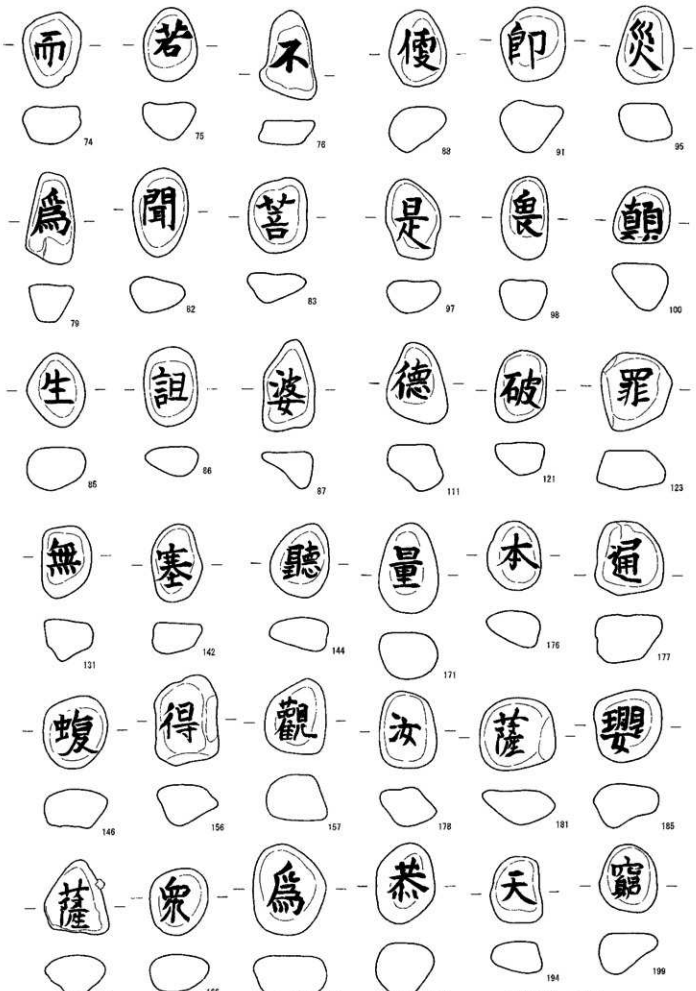
旧塔軸２
（旧右面）

旧塔軸２　（旧左面）

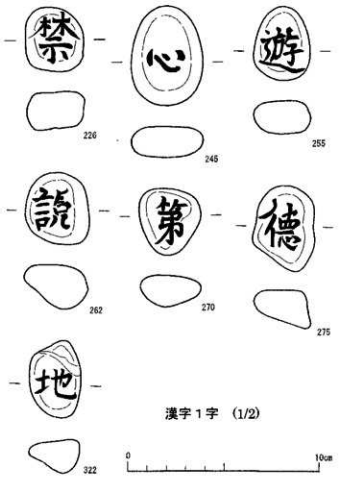
旧塔軸２
（旧裏面）

漢字１字　(1/2)

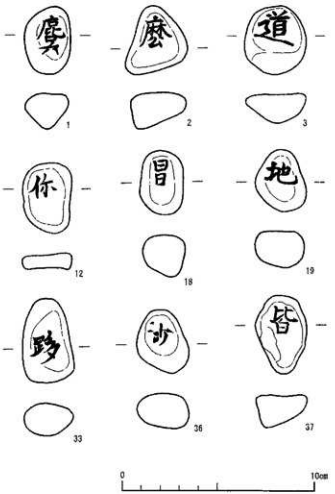
礫石経実測図（1）



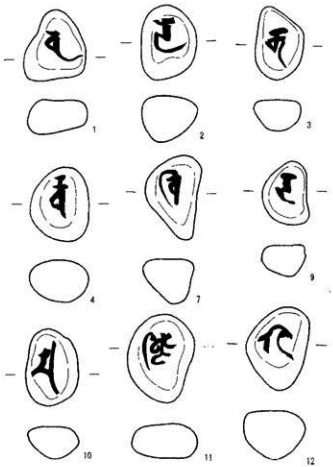
礫石経実測図（2）　漢字１字　(1/2)



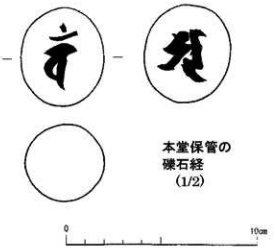
漢字１字　(1/2)



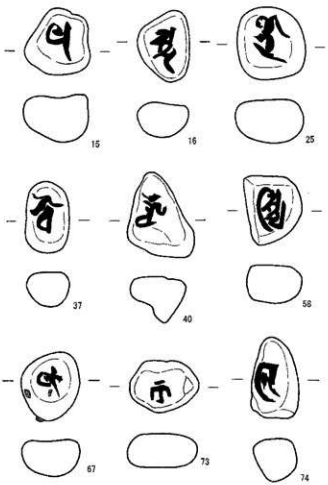
漢字１字小字形　(1/2)



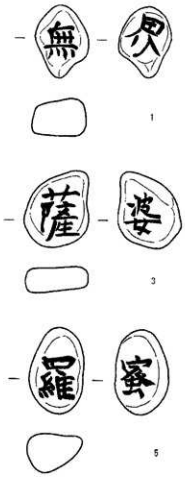
梵字１字　(1/2)



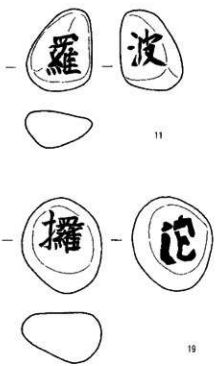
礫石経実測図 (3)



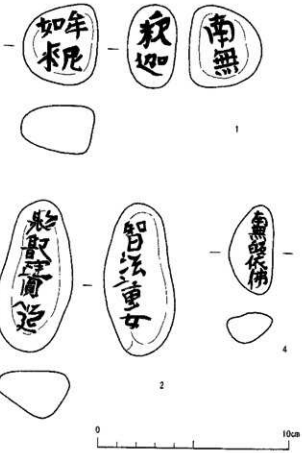
梵字１字　(1/2)



漢字表裏１字　(1/2)

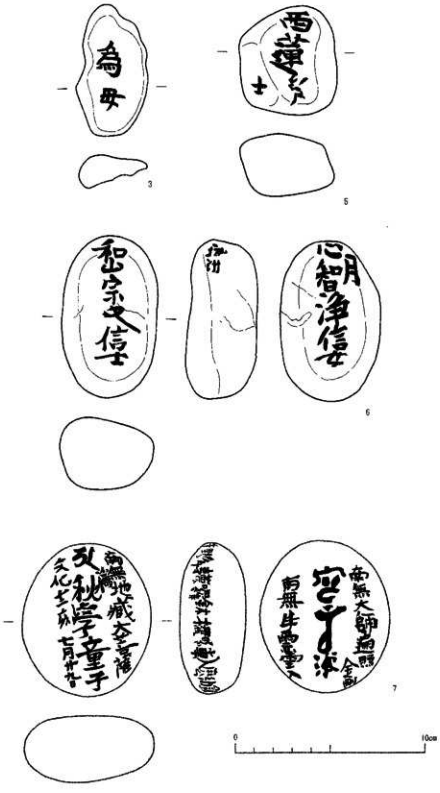


漢字表裏１字　(1/2)



多字　(1/2)

礫石経実測図（4）



多字　(1/2)

礫石経実測図 (5)

富山寺宝篋印塔1

宝篋印塔全景（南東から）

相輪　上端宝珠

軸1　梵字サク（南面）

笠　隅飾突起の文様と整形

基礎　波涛文（東面）

軸2　梵字シッチリア陽刻

軸2　北面刻銘（光明真言梵字）

軸2　西面刻銘（宝篋印陀羅尼経）

基壇刻銘（西面）

基壇刻銘　石工名（西面）

基壇2段目　中空状況

基壇4段目上面のくぼみ穴（南西隅）

富山寺宝篋印塔3

解体前（南・正面から）

解体前（北西から）

補強作業

解体作業

基礎撤去後、基壇内部に軸部検出

軸２上面のモルタル残片

基壇内の旧軸２納置状況（上部）

基壇内の旧軸２納置状況（上部）

基壇内の軸納置状況

基壇内の旧軸２と礫石経

礫石経全景

基壇内の軸撤去状況

礫石経下の盛土状況

盛土周囲の板石解体後

基壇切石下の基礎石

宝篋印塔撤去後（南から）

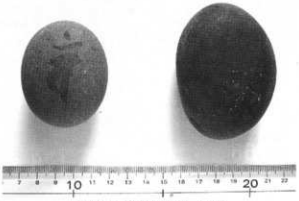
旧塔軸２　西面（旧右面）

旧塔軸２　北面（旧正面）

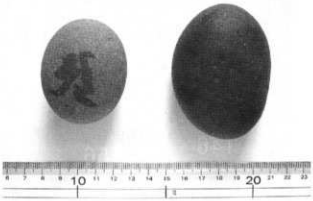
旧塔軸２　東面（旧左面）

旧塔軸２　南面（旧裏面）

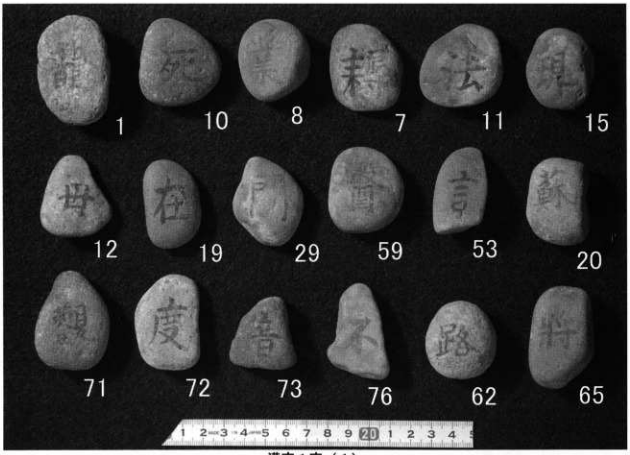
旧塔軸２　上面
（写真上が西面）



本堂保管の礫石経（表）



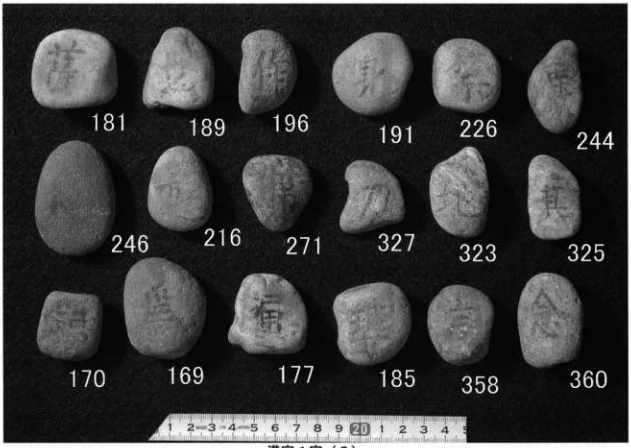
本堂保管の礫石経（裏）


1
10
8
7
11
15
12
19
29
59
53
20
71
72
73
76
62
65

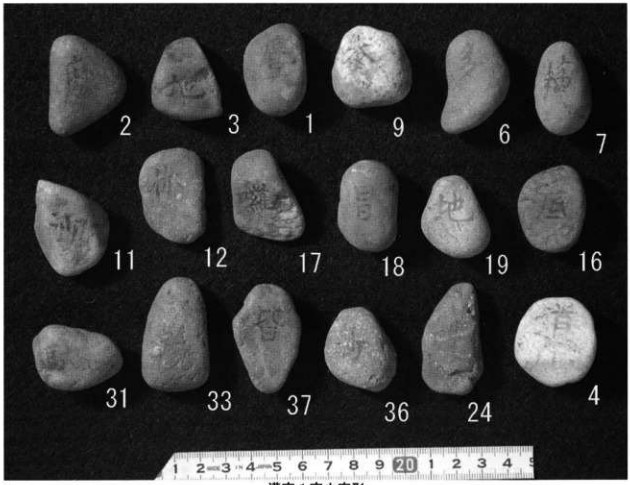
漢字1字（1）

82
97
95
107
105
86
119
123
144
142
124
111
146
156
157
166
176
178

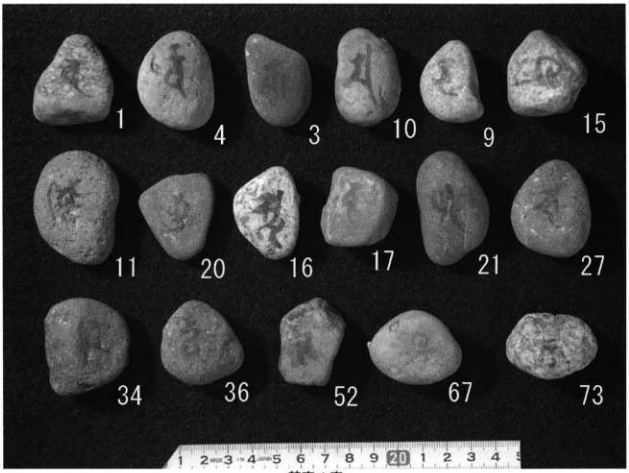
漢字1字（2）



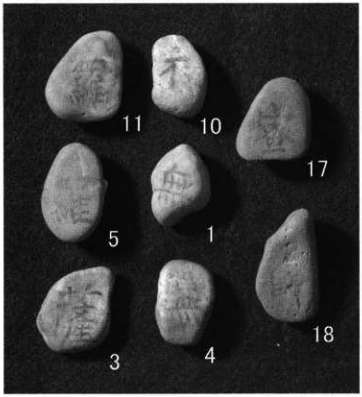
漢字１字（３）



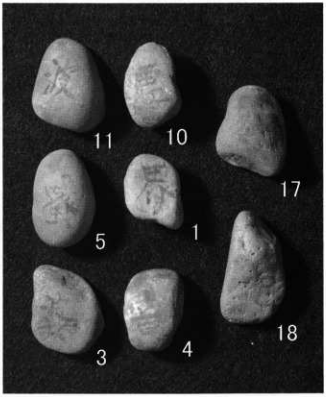
漢字１字小字形



梵字１字



漢字表裏１字（表）



漢字表裏１字（裏）

梵字58　シッチリア（画像処理）

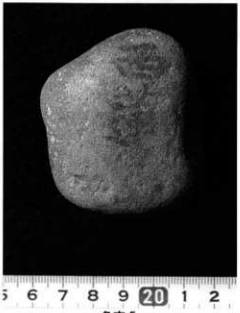
多字1

多字2

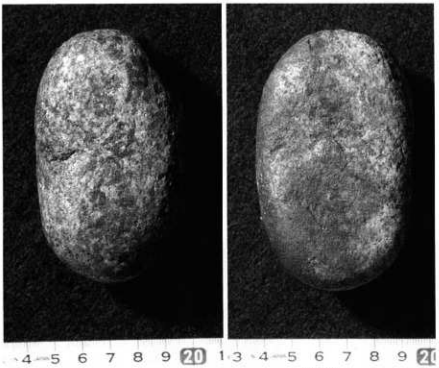
多字3

多字4

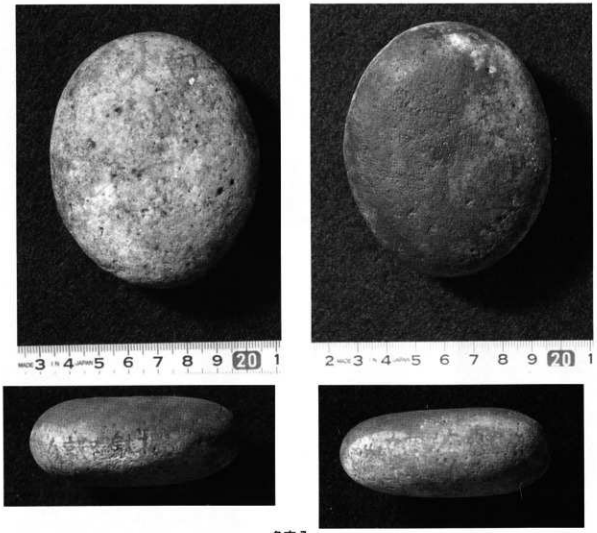
（画像処理）



多字5



多字 6



多字 7

2　長栄山宝憧寺関連石造物

(1)調査の目的　宝憧寺二世龍淵に関連する芦峅寺所在石造物の記録調査

(2)調査日　平成24（2012）年6月～8月

(3)調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）

(4)所在地　立山町芦峅寺閻魔堂・教算坊

(5)種別　手水鉢

(6)宝憧寺概要

真言宗長栄山宝憧寺（金刀崑羅堂）は、天保元（1830）年開寺、同2年富山藩から一千歩の寺地を拝領した。開寺にあたり、文政12（1829）年八尾町年寄八丁尾五代四郎兵衛が世話人となり、当時立山芦峅寺で隠遁生活をしていた真言宗学侶龍淵を八尾町に招聘し、開寺の準備を進めた。1世は四郎兵衛の弟弘全で、開寺まもなく死去した。龍淵は2世となり、天保8年西岩瀬海禅寺住職快国の弟子快賢が3世となった。隠居した龍淵は、天保8年死去し、弘全の墓に一緒に葬られた〔八尾町史編纂委員会 1967・福江 1998〕。

寺地は西町2318付近にかつて存在し、現在は旧寺地内の一角に「金比羅堂」と呼ばれる堂社をもち寺号を継承している。江戸期の詳細は、『富山市内石造物等調査報告書』2012に詳しいので、参照されたい。

(7)石造物調査概要

龍淵がかつて居住し、また本寺建立に携わった後終息の地とした立山町芦峅寺には、龍淵に関係する石造物は3基認められる。閻魔堂に2基、芦峅寺教算坊に1基があり、その種類は、手水鉢2基・石碑1基である。

①阿字観碑（龍淵墓石）

文政13（1830）年造立閻魔堂境内の阿字観碑は、富山県〔立山博物館〕調査報告〔富山県〔立山博物館〕編 1993〕のE-2である。

自然石安山岩の表面に阿字と銘文を陰刻した自然石碑で、高さ43.2寸（130.8cm）、最大幅42.2寸（128cm）、最大奥行38.9寸（118cm）である。

正面中央上部の阿字梵字は、丸彫で、月輪の陰刻内に深く彫り込まれる。月輪上端は最頂部から15寸（45.5cm）下である。阿字の下の月輪内には、実が大きくなった蓮花が描かれ、斜め上からの表現で陰刻している。

阿字下の刻銘は、楷書で大きく「法印龍淵墓所」と彫る。

その左側には3行にわたり、「本朝高祖弘法大師御真筆写／奉仏祖報恩法印龍淵建立／文政十三秋石工菩名苴藏」とあり、阿字直下の文字の約4分の1の大きさである。右列から左列に進むにつれ書き出しが下がる。3列ともに同じ大きさの文字であるが、1行目と2行目の「祖」の字形が異なっており、3行が同時に刻まれたかは不明である。

台座は、板状石6枚を横置きして組み合わせ、横42寸（127.3cm）、奥行37.3寸（113cm）、高さ4寸（12.1cm）～7寸（21.2cm）に組む。中央部は径約70cmの円形に穴が開けられており、そこに石碑基部を入れている。台座の正面には、上下2文字の梵字を12行にわたり陰刻している。24文字の光明真言梵字である。裏面には、「天保八丁酉年／正月十一日寂」「当一山中／造営之」と2石にわたり4行の文がある。

元来この石碑は、境内別地点にある頂部が窪んだ凝灰岩質の自然石の上に乗せられていたものとい

う。立山博物館調査時点ではすでにこの自然石は取り外されていたことになるが、その行為が天保 8 年の墓石改修の際の切石基礎への変更時点にまで遡ることができるかどうかは、現段階では不明である。

②手水鉢の調査

A　手水鉢 1

閻魔堂参道入口の木造祠内には、不動明王を浮彫した自然石石仏があり、その手前に手水鉢が安置されている。富山県〔立山博物館〕調査報告の F-6 である。安山岩自然石の上面に円形の水溜を穿ったもので、正面に刻銘がある。

刻銘は、中央にやや大きく「為師匠父母」、右に「淡路三原市田／五大方山法印竜淵」、右に「文政七申秋　善名／石工甚蔵」とある。幅 38.3 寸(116cm)以上、奥行 23.3 寸(70.6cm)以上、高さ 18.2 寸(55.1cm)以上で、下部は埋まっており、全体規格は不明であるものの、大型品である。

水穴は平面円形で、直径 11.2 寸（34cm）、深さ 4.3 寸(13cm)、底部は皿型に湾曲する。安山岩製玉石を利用して加工。この手水鉢は、其蔵の石工銘のうち最古のものである。

B　手水鉢 2

教算坊庭園に所在する手水鉢は、球形の安山岩自然石の上面に円形の水穴を穿ったもので、鉄鉢形である。

正面の刻銘は、中央に大きく「漱」、その左下に「竜淵逆修」と小さく刻む。幅 25 寸（75.8cm）、奥行 19.3 寸(58.5cm)、高さ 17.2 寸(52.1cm)以上で、下部はわずかに埋まる。小型品で、蹲踞様式である。水穴は平面円形で、直径 11.9 寸（36cm）深さ 4.8 寸（14.5cm）、底部は皿型に湾曲する。安山岩製。石工銘はないが、「竜淵」の銘が同一筆跡で、いずれも龍を略字体としていること、水穴の形状が相似形であること等の諸点から、2 つの水鉢は同一石工の製作品と認められる。

(8)考察

①手水鉢奉納について

真言僧龍淵は、もと高野山天徳院に学んだ法印号をもつ真言僧で、文政 5（1822）年金沢から立山芦峅寺に移り、芦峅寺一山の布教活動に助力した人物である。龍淵の履歴や活動の詳細は、福江充氏の研究に詳しい〔福江 1998〕。

これによれば、龍淵は淡路国三原郡樋田（現兵庫県南あわじ市松帆）出身で、天明 7（1787）年同所にある五大力山逼照院願海秘密一乗寺（現願海寺）に入って龍成上人に師事し、翌年高野山に入っている。

以上のことから、閻魔堂参道入口の文政 7 年手水鉢の正面に見える刻銘は、龍淵自身の出身に関わる来歴を示し、その師匠、すなわち逼照院龍成上人と龍淵の父母のために奉納した手水鉢と理解できる。龍淵が晩年芦峅寺から八尾町に移り開山した真言宗長栄山宝憧寺の過去帳によれば、龍成上人と父母の忌日が確認できないものの、年齢的にみて、龍成上人・父母がこの頃相次いで死去したものと推定される。願海寺墓地に所在する龍成上人墓石とみられる無縫塔には、「文化十二亥七月二十八日」の忌日が刻まれており、文化 12（1815）年に死去したとみられる(1)。手水鉢の製作は、龍成上人死去 9 年後にあたることになる。

また、教算坊に所在する手水鉢は、この閻魔堂参道入口の手水鉢と刻銘の特徴が共通することからみて、文政 7 年に 2 基同時に製作されたか、あるいはこれと前後する近い時期の製作と考えられる。現在庭園において蹲踞を構成しているが、当初からこの庭に存在したかは疑わしい。刻銘にある「逆修」は、生前供養を示し、先にみた閻魔堂参道入口手水鉢の刻銘に見える恩師父母の追善供養と対置

的な関係において理解されることになろう。

②阿字観碑について

この阿字観碑については、すでに福江充氏による分析が行われており、阿字観碑から龍淵墓所に転じた経緯などについて明らかにされている〔福江 1998〕。

これによれば、龍淵は文政 12 年、八尾町年寄古川屋四郎兵衛により宝憧寺開山のため八尾町に招聘され、芦峅寺を去った。その後約 1 年を経て、龍淵は芦峅寺における阿字観碑の建立を発願し、芦峅寺一山はその建設に助力したとみられる。龍淵は天保 8 年 1 月死去したため、芦峅寺一山は龍淵の功績を称えて、この阿字観碑に「法印龍淵墓所」と追刻し、台石も新調した。台石には龍淵の忌日と一山がこれを造立したことを彫った、というものである。

刻銘からみると、石工甚蔵の表記において、「善名」に村が付されておらず、その形は文政 7 年手水鉢と共通している。また、「法印龍淵墓所」の楷書文字は、跳ねなど細部がシャープで細く、「本朝高祖」以下 3 行のやや丸みのある楷書文字と字体が異なっており、下書の筆記者が異なる。「淵」字については、「法印龍淵墓所」では字形が崩っている。なお、台座裏面の文字は「法印龍淵墓所」の字体と共通する特徴で、筆記者は同一人物と推定される。

以上の観察から、福江氏の推定した追刻されたとした経緯については、誤りのないところである。

③石工甚蔵と龍淵

芦峅寺に所在する龍淵関係石造物 3 点のうち 2 点は、石工銘の存在から、常願寺川左岸中流の善名村に工房をもつ石工北野甚蔵が製作したことが明らかである。また、石工銘のない教算坊の手水鉢についても、閻魔堂参道入口の手水鉢との類似から、甚蔵の製作になるものと推定される。

したがって、龍淵が発願した芦峅寺の石造物については、すべて甚蔵が製作したものである可能性が高い。

その製作を龍淵が直接甚蔵に依頼したのか、それとも芦峅寺一山を介して依頼したのかは定かではない。いずれにせよ、龍淵墓所の造立に見るように、芦峅寺一山と甚蔵との関係が龍淵の死後も維持されていることから、両者は大きく関わっていたことがわかる。

甚蔵の石工銘のある石造物は、文政 7 年閻魔堂入口の手水鉢が最古のものであるが、共同墓地内には、甚蔵が製作したとみられる舟形墓石が複数存在し、その最古の年代は文化 6（1809）年である。多くは天保年間（1830～1843）である。

このように甚蔵は、龍淵が手水鉢奉納を発願した文政 7 年以前において、芦峅寺における石造物製作の実績があった。このようなことが甚蔵への製作依頼へつながったのであろう。なお、芦峅寺における甚蔵の製作活動は、幕末の文久年間まで継続するが、嘉永 5（1852）年以降は在所周辺の石仏製作を中心に行うようになっている。

④小結

龍淵による手水鉢や奉納は、仏門に入った最初の師である淡路国願海寺龍成上人や両親に対し、おそらく菩提を弔うために行われたものと推測できる。その後に行われた阿字観碑の造立は、それらと関連した作善行としての造立供養と理解される。今回師龍成上人の忌日が知られ、それは 9 年後の 10 回忌にあたるが、一般的な年忌法要の年忌ではない。父母の没年が不明なため、これらの石造物造立の契機となった具体的な事情が不明であるが、上記のように考えておくことが妥当であろう。

注

1　願海寺を管理する龍宝山智積寺（南あわじ市湊里）ご住職の記録・写真による。なお、願海寺は無住で、過去帳も古いものは存在しないということである。

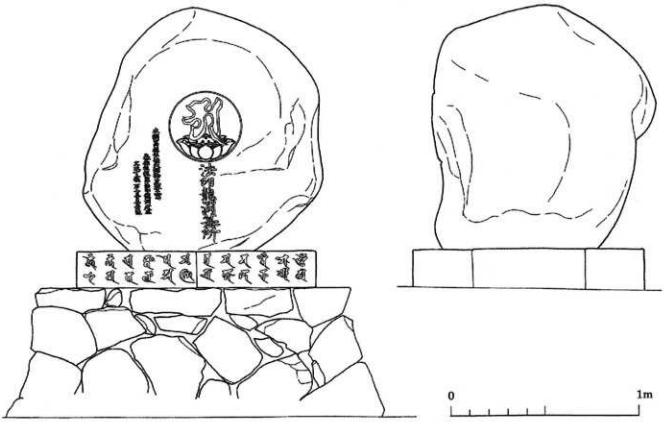


図１　閻魔堂境内阿字観碑・龍淵墓　実測図

図２　阿字観碑・龍淵墓
阿字部分実測図・拓影

図3　阿字覩碑・龍淵墓
阿字下刻銘　実測図

0　10cm

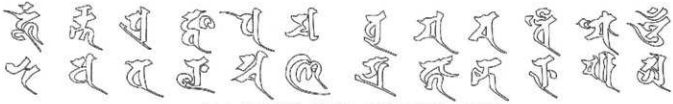


図4　阿字覩碑・龍淵墓　台座正面刻銘　実測図

0　10cm

図5　台座裏面刻銘　実測図・拓影

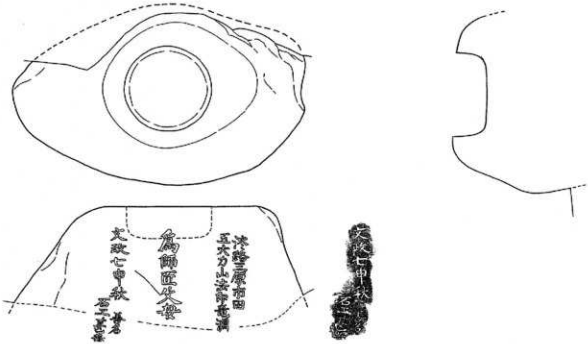


図６　閻魔堂参道入口の手水鉢　実測図

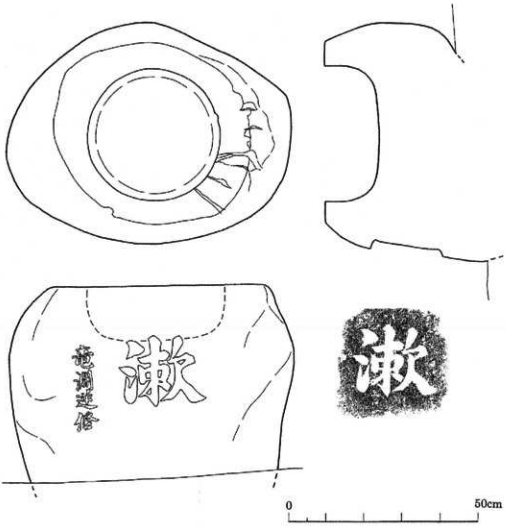
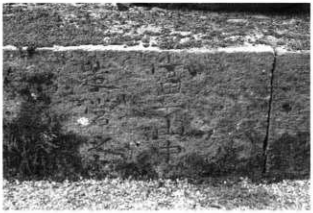


図７　教算坊庭園の手水鉢　実測図

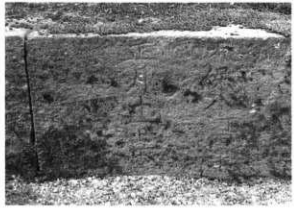
閻魔堂境内　阿字観碑　正面全景

阿字部分

光明真言を彫った台座



台座裏面刻銘（左）



台座裏面刻銘（右）

石碑旧台座と伝える石（中央上部が大きく窪む）

閻魔堂参道入口　不動明王石仏前の手水鉢

手水鉢　正面から

左横から

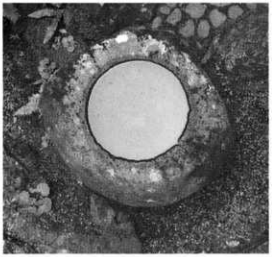
刻銘（石工名）

刻銘　「龍淵」

教算坊庭園手水鉢　設置現状

正面　斜め上から

教算坊庭園手水鉢　正面から



上から

南あわじ市願海寺墓地　龍成上人墓石
（龍宝寺智積寺提供）

3　大岩山日石寺宝篋印塔

(1) 調査の目的　常願寺川石工中川甚右衛門製作石造物の記録調査

(2) 調査日　平成 24（2012）年 1 月～6 月

(3) 調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）

(4) 所在地　上市町大岩　大岩山日石寺境内

(5) 種別　宝篋印塔

(6) 年代　文政 4（1821）年

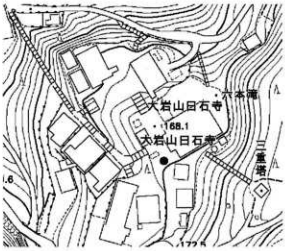
(7) 日石寺の概要

大岩山日石寺は、真言宗古刹である。

聖武天皇神亀 2（725）年、行基が岸壁に不動明王磨崖仏を彫ったと伝え、「大岩不動」として知られる。昭和 49 年「大岩日石寺磨崖仏（不動明王及び二童子像、阿弥陀如来坐像、僧形坐像）」として国の重文指定を受けた。

平安中期以降隆盛を極め、天正年間上杉勢に攻勢により焼失したとされる。

慶長年間には弘寒上人が磨崖仏に堂舎を掛けた。慶安 4（1651）年加賀藩永代祈願所となった。



宝篋印塔位置図（図中●）

客殿・庫裏等は寛文 2（1662）年建立された。11 世如龍は、文政 13（1830）年境内に窟を掘り、四国西国観音を置いた。また三重塔建立を発願し、12 世覚伝代に完成した。如龍は天保 3（1832）年没である。今回調査した宝篋印塔は、如龍代に造立されたものである。

本寺の詳細については、『上市町誌』、『富山県の地名』等に詳しい。大岩不動に関する詳細については、大村正之・京田良志による報告がある。

なお、延宝 3（1675）年『延宝年中加越能社寺来歴』では、当山不動は聖武天皇天平 6（734）年行基作としている。貞享 2（1685）年『寺社由来』及び『貞享二年寺社由緒書上』では天平 2（730）年と 4 年遡り、それ以後は、文化年間以降の『三州寺号帳』等、すべてその年代とされている〔井上校訂 1974〕。

(8) 調査概要

①経緯

本石塔は、日石寺境内入口南側に所在する。組合式で、江戸後期における越中真言宗寺院の模範様式を備えた塔である。平成 23 年に解体修理が行われた。発掘等調査が行われなかったため、内部の状況については不明である。塔本体の遺存状態は良好である。

表1　日石寺宝篋印塔の規格

区分	高さ		幅		石材	備考
	寸	cm	寸	cm		
相輪	32	97	9.5	28.8	立山天狗山石	九輪上部を補修？
笠	12	36.4	30.8	93.3	立山天狗山石	軒上5段、軒下2段
帕1	10.5	31.8	10.3	31.2	立山天狗山石	月輪＋梵字種子
反花	1.5	4.5	15.5	47	立山天狗山石	
帕2	14.5	43.9	15.5	47	立山天狗山石	円形彫込
請花	8.5	25.8	24.2	73.3	立山天狗山石	
饅頭形	7	21.2	20.7	62.7	立山天狗山石	雲文浮彫
反花	4.3	13	26.5	80.3	立山天狗山石	基礎と一体
基礎	5.7	17.3	26.5	80.3	立山天狗山石	格狭間に波濤文
基壇1	7.2	21.8	32.7	99.1	八川石	
基壇2	9	27.3	39.4	119.4	八川石	4面に刻銘
基壇3	10	30.3	46.8	141.8	八川石	
基壇4	11.5	34.8	55	166.7	八川石	
基壇5	12	36.4	64	193.9	八川石・立山天狗山石	
基壇6	6	18.2	73.2	221.8	八川石・立山天狗山石	
本体高	151.7	459.7				

②全体構成

本石塔は、コンクリート基壇の上に存在する。石塔の全高は15尺1寸7分（459.7cm）である。石塔の構成は、上から、相輪・笠・塔身5段、基礎2段、基壇6段の計15段構成である。

③相輪

上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の構成で、1石で造る。

宝珠は先端が小さく尖り、半球形である。先端は欠失する。上部請花は、主弁6葉間弁6葉の計12葉の蓮弁で、主弁には6本の弁脈が立体的に表現される。九輪は下部径が大きい。下部請花は上部請花同様6本の弁脈をもつ。主弁は弁長3寸弁幅4寸で、横長の弁形となる。

伏鉢は2段の円筒形で、下の笠上面を円形に彫り込み、組み合わせる。

修復前は、九輪の4段目と5段目の間で折れており、鉄板4本で固定されていたが、接着補修され、その周辺が灰色に着色された。安山岩製。復元高さ3尺2寸（97cm）。

④笠

軒上5段、軒下2段である。笠上の伏鉢も一体で作る。隅飾突起は約50°の角度で外側へ広がる。内側は弧状となり、そこから上方に子葉が1枚延びる。突起内の文様は、輪郭を巻いた弧下端が渦巻状となり、内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により凹凸を表現する。

隅飾突起の上面において、先端から内側に2寸（6.1cm）入った頂部に小穴が穿たれていた。穴は、直径0.5寸（1.5cm）、深さ0.5cmで、直上に向いて開いている。五輪塔高寺の寛政9年宝篋印塔にも笠に同様な小穴が認められ、これは相輪上部と隅飾突起との間に金属性鎖を渡して装飾するための、輪金具の取付穴であった〔古川・蓮沼 2009〕。本石塔における金属製装飾品の存在は不明であるが、おそらく付けられていたものであろう。

⑤塔身

4石5段の構成で、上から軸1、反花、軸2、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸2を1石で造る。

A　軸1　方形石の四面に梵字種子を彫る。梵字種子は、面一杯の大きさに彫られた月輪の中央に、丸彫りで彫る。深さは1寸（3cm）と深い。4つの梵字種子は、密教でいう金剛界曼荼羅に説く金剛界五仏のうち大日如来を除く四仏を示す。宝篋印塔本体は主尊である大日如来を意味すると理解されている。四仏は定まった方位に配置される。北面は不空成就如来（梵字種子：アク）東面は阿閦如来（梵字種子：ウーン）、南面は宝生如来（梵字種子：タラーク）、西面は阿弥陀如来（梵字種子：キリーク）である。本石塔では、方位どおりに梵字が配置されている。

B　反花　軸2と1石で造る。主弁は弁脈6本を配する単弁8葉で、主弁間に間弁を置き、計16弁で構成する。蓮弁の先端には縦長の浅い窪みがある。

C　軸2　方形石の北面中央に、径8寸、深さ3.8寸の円形の彫込みを設け、下面を平らに整形している。この空間には現在何もないが、おそらくここには小石仏が安置されていたと推測する。他の3面は平滑面で、無文無銘である。

D　請花　1石で造る。8本の弁脈をもつ単弁8葉の主弁を2段に配し、上段の主弁間に間弁を置き、計24弁で構成する。弁脈は立体的で、蓮弁の先端は尖る。下段主弁の弁長6寸（18.2cm）弁幅10寸（30.3cm）で、横長の弁形となる。間弁も弁脈4本をもつ。

E　饅頭形（敷茄子）　1石で造る。平面形は四角形で、側面は半円形の断面形である。側面の文様は、4面ともに楕円形状に浅く彫り込んだ中に祥雲文を浮彫りする。祥雲の数は、正面となる北面は8つ、西面は9つ、南面は8つ、東面は8つを2段に並べている。各面の祥雲は、左・中・右の3つの

ブロックに分かれており、それぞれの数が面により異なる。北面は3+2+3、西面は3+3+3、南面は3+1+4、東面は2+3+3である。各祥雲は、位置・大小・尾の方向などが異なっており、同じ構成のものはない。

⑥基礎　2段からなる。上段の反花と下段の方形石を1石で造る。反花は、8本の弁脈をもつ単弁8葉の主弁を2段に配し、下段の主弁間に間弁を置き、計24弁で構成する。いずれも立体的な弁脈を配する。蕾弁先は尖って反っており、各弁先端は縦長の窪みを刻む。

方形部は、4面とも楕円形状の彫り込みの中に波涛文を浮彫りする。図柄の構成は、各面で異なり、正面の北面が中央で割れる2波頭と左右の2波頭、西面が右半に3波頭左半に2波頭、南面が6つの波と小さな2波頭、東面が中央左に2波頭と右に2波頭+6円文である。

⑦基壇

A　規格　切石49石を組み合わせた基壇6段がある。各段の切石数と幅を表2に示した。

表2　宝篋印塔基壇規格

段数	切石数	横幅		奥行		高		部材番号	備考
		寸	cm	寸	cm	寸	cm		
1段目	2	32.7	99.1	32.6	98.8	7.2	21.8	1～2	
2段目	8	39.2	118.8	39.5	119.7	9	27.3	3～10	
3段目	8	46.8	141.8	46.7	141.5	10	30.3	11～18	
4段目	8	55	166.7	55	166.7	11.5	34.8	19～26	4面に刻銘
5段目	12	63.8	193.3	64	193.9	12	36.4	27～38	南面に刻銘
6段目	11	73.2	221.8	73.2	221.8	6	18.2	39～49	
計	49								

特徴としては、幅と奥行きがほぼ同じで、下方ほど高さが高くなることがあげられる。最下段は薄い。切石単体の規格等は表3のとおりである。切石の長辺は、最小9寸（27.3cm）から最大3尺3寸5分（101.5cm）である。1段目は同寸の2石を置く。2段目以下は、四隅に方形石を置き、間に長い石を充填する。2～4段目では1石、5段目では2石となる。6段目では四隅に長い石を置き、間は2石を置くが、北面のみは長い石3石を置き、小口を見せず石数が少ない。これは正面であることを意識しているのであろう。礫石経投入口はない。各板石の表面はビシャン叩きにより平滑に仕上げられており、6段目のみ周囲1寸幅をビシャン叩きし縁取りを行う。内側はハツリ痕を残す。

B　刻銘　刻銘は、4段目と5段目にある。4段目は、4面とも中央の石材に刻銘がある。

北面は願文趣意である。語句の引用先は不明（大蔵経中には見えない）である。東面は造立年・十支である。月日までの記載はない。南面は石塔建立時の日石寺住職11世如龍であることを示す。西面は石塔を製作した石工名で、甚右衛門が単独で製作したことがわかる。

【基壇4段目 北面】
日本
国中
神仏
霊十
供養
納置

【南面】
当院
十一世
如龍
建立

【東面】
文政
四辛
巳年

【西面】
石工
馬瀬口
中川甚右衛門

【基壇5段目・南面】
石取人足寄進
三百人内
百人　太田本江村
百人　西ノ番村
百人　此之処
右
世話人

本江
浮田善左衛門
同　四郎右衛門
同　治郎左衛門
小柴金右衛門
西ノ番
金山庄右衛門
忠左衛門
善左衛門
善右衛門
長治郎

基壇4・5段目刻銘

5段目は、南面2石に刻銘がある。東側の1石には「石取人足寄進三百人」とあり、この石塔製作のための石材調達・運搬に供出された人足数を示したものである。太田本江村・西ノ番村・大岩村から各100人の延300人が石取りのため労働力の提供があったことがわかる。

⑦石材

石塔部材・基礎・切石基壇ともに常願寺川の安山岩である。大別して以下の3種がある。

A：八川石（青灰色を呈し、縞が入る）

B：八川石（淡赤色を呈し、縞が入る）

C：立山天狗山石（角閃石安山岩）

表3　基壇板石規格

段	番号	位置	長 寸	長 cm	高 寸	高 cm	厚 寸	厚 cm	石材	刻銘	備考
1段目	1	北面	32.7	99.1	7.2	21.8	16.3	49.4	A		
	2	南面	32.7	99.1	7.2	21.8	16.3	49.4	A		
2段目	3	北面	8	24.2	9	27.3	7.8	23.6	A		
	4	北面	24	72.7	9	27.3	計測不能		A		
	5	北面	8.9	27	9	27.3	7.4	22.4	A		
	6	西面	23.5	71.2	9	27.3	計測不能		A		
	7	西面	8.7	26.4	9	27.3	7	21.2	A		断石
	8	南面	22.5	68.2	9	27.3	計測不能		A		
	9	東面	9	27.3	9	27.3	8.3	25.1	A		
	10	東面	22.8	69.1	9	27.3	計測不能		A		
3段目	11	北面	10	30.3	10	30.3	7.9	23.9	A		
	12	北面	28.9	87.6	10	30.3	計測不能		A		
	13	北面	10	30.3	10	30.3	10	30.3	A		
	14	西面	26.8	81.2	10	30.3	計測不能		A		
	15	西面	10	30.3	10	30.3	10	30.3	A		
	16	南面	26.7	80.9	10	30.3	計測不能		A		
	17	東面	9.9	30	10	30.3	9.9	30	A		
	18	東面	26.8	81.2	10	30.3	計測不能		A		
4段目	19	北面	11	33.3	11.5	34.8	11	33.3	B		
	20	北面	33	100	11.5	34.8	計測不能		B	刻銘	
	21	北面	11.1	33.6	11.5	34.8	11	33.3	A		
	22	西面	33.1	100	11.5	34.8	計測不能		B	刻銘	
	23	西面	11	33.3	11.5	34.8	11	33.3	A		
	24	南面	33.5	102	11.5	34.8	計測不能		B	刻銘	
	25	東面	11	33.3	11.5	34.8	10.5	31.8	A		
	26	東面	33	100	11.5	34.8	計測不能		B	刻銘	
5段目	27	北面	12	36.4	12	36.4	12	36.4	A		
	28	北面	22.2	67.3	12	36.4	計測不能		A		
	29	北面	18.3	55.4	12	36.4	計測不能		A		
	30	北面	11.7	35.5	12	36.4	10.8	32.7	A		
	31	西面	20	60.6	12	36.4	計測不能		C		
	32	西面	18.5	56.1	12	36.4	計測不能		A		
	33	西面	13.5	40.9	12	36.4	9.6	29.1	A		
	34	南面	19.7	59.7	12	36.4	計測不能		A	縞銘	
	35	南面	21.2	64.2	12	36.4	計測不能		A	刻銘	
	36	東面	12.9	39.1	12	36.4	12.9	39.1	A		
	37	東面	21.6	65.4	12	36.4	計測不能		A		
	38	東面	17	51.5	12	36.4	計測不能		A		
6段目	39	北面	23.2	70.3	6	18.2	8	24.2	C		
	40	北面	26.2	79.4	6	18.2	計測不能		C		
	41	北面	23.8	72.1	6	18.2	9.1	27.6	C		
	42	西面	21.2	64.2	6	18.2	計測不能		C		
	43	西面	24.4	73.9	6	18.2	計測不能		C		
	44	西面	19	57.6	6	18.2	9.7	29.4	C		
	45	南面	30.1	91.2	6	18.2	計測不能		C		
	46	南面	24.2	73.3	6	18.2	計測不能		C		
	47	東面	26.8	81.2	6	18.2	9.2	27.9	C		
	48	東面	19.5	59.1	6	18.2	計測不能		C		
	49	東面	18.8	57	6	18.2	計測不能		C		

相輪・笠はC、軸1・軸2はA、宝頭形はB、基礎から下はA及びBである。基壇最下段のみCである。ほぼ同じ質の石材A・Bの違いは色調であり、イメージとして赤・青の違いとして意識されていることは、基壇4段目の刻銘のある石材が、石工銘のある1石を除き、いずれも淡赤色の石材で作られていることから推測される。この淡赤色の石材は同じ段の北東隅石（石材19）に1石のみ使われている。この赤と青の色の違いは、金沢戸室石においても意識されており、硬くて見栄えのよい青石が上級石材とされている。A・B石材は、富山町石工も石塔板石として使用している。

基壇における板石の石材別数量は、八川石（青）が32石65%、八川石（赤）が5石10%、立山天狗山安山岩が12石25%で、八川石（青）が主体を占める。

太田本江村と西番村から人足が調達されたのは、両村ともに常願寺川に近く、その河川敷における石材調達を意識したものであろう。

⑧補修痕跡

平成23年7月、劣化に伴い本格的な解体修理が行われた。その内容は、基壇下のコンクリート補強、基壇2段目南西隅石（石材7）の新石への取替、笠欠損部の樹脂充填、相輪途中の折れの接着があり、また全体がモルタルで固定された。この他、修理の過程で、基壇石材の1つが取り替えられた。

⑨基壇内部の状況

平成23年の解体修理は上市町下経田の濱田石苑建設株式会社が日石寺から請負って実施した。修理は最下壇まで解体し、基礎をコンクリートにしてその上に石塔を復元した。その際に基壇内部の状況が明らかになった。

基壇内部には、数cmから30cm大の石が入っていた。石は大岩川に存在するような石であった。基盤は巨石の岩盤で、大きな加工は認められなかったが、わずかに取り合いが見られた。石を取り出し、コンクリート基礎を作った後、復元した基壇内部に砕石（クラッシャーラン）を充填した（濱田石苑建設談）。

それら内部にあった石は、7石を残しすべて廃棄された。その7石は、拝殿右奥の三重塔参道階段左側にある百体仏（D地区）の基礎部に並べ、コンクリートに埋め込んで補強されていた。

この7石を観察すると、大きさは12～33cm、形状は玉石6、亜角礫1、石材は、花崗岩・砂岩・安山岩・泥岩等であり、亜角礫は礫岩である。

これらは石塔内部の礫のごくわずかであり、大きめのものとみられる。これらの表面には墨書は認められない。小さな礫に経文等の墨書があったかどうかは不明である。

(8)考察

①造立目的とその背景

本石塔は文政4年日石寺11世如龍代に造立された。

基壇正面の刻銘は、主願意である。「日本国中神仏霊土供養納置」は、あまねく霊への供養のため石塔を造立し経典を納めというもので、一般に多く見られる「三界万霊」と近似した意味の語句とみられる。

その発願者であり、石塔造立完成供養を行ったのは、文政4年当時の住職である11世如龍である。おそらく数十人に及ぶであろう信徒が費用を寄進して造立したものと考えられる。信徒の出身地として「岩倉寺」「西番」があるが、いずれも常願寺川上流にあたり、石工中川甚右衛門の工房のある馬瀬口村に近い。宝篋印塔製作者として文政年間に名前が見えるのは、甚右衛門のほか神通川右工佐伯伝右衛門がいる。甚右衛門が製作するに至ったのは、信徒集落と近接していた他に、当時龍高寺・東薬寺・中川家墓地などで造立されており、力量を認められていたことも理由として考えられる。

造立の契機となった文政4年は、寺史あるいは11世如龍にとって重要な意味のある年代とみられるが、現在のところ不明である。寺史において如龍は中興と称されている。

『上市町誌』によれば同寺過去帳に如龍の情報がある。天保3年12月5日52歳で遷化、庫裡を大改造、土蔵を建立した。文政13年に三重塔建立を発願し、12世覚伝代完成は弘化2年に完成した。山内の岩に窟を掘り、四国西国の観音その他鎮守として金毘羅・稲荷神を安置したとされる。

②世話人・寄進者について

基壇5段目の刻銘により、宝篋印塔造立が計画され、石取（石材調達）のための人足延べ300人が調達されたとことがわかる。その世話人として、太田本江村の浮田善左衛門ほか3人、西ノ番村の金山庄右衛門ほか4人の計9人の名前が記されている。

太田本江村は、現在の富山市太田南町・大宮町・太田で、浮田家・刀尾神社・刀尾寺・的場の清水がある。浮田善左衛門は、加賀藩奥山廻役役儀第8代で、文政10年1500石を拝領、翌年現浮田家役宅を建築した。安政3（1856）年死去した。宝篋印塔を造立した文政4年は、7代善右衛門が文化7年死去後であることから（『太田郷土史』）、善左衛門が山廻役のみ任命されていた時期とみられる。

浮田四郎右衛門・浮田治郎左衛門・小柴金右衛門は、「新川郡太田本江村御田地割、仕合盛米惣歩数書上申帳」（『富山県史』史料編Ⅲ）によれば、天保10年太田本江村隠頭(1)7人のうちの3人である。四郎右衛門・治郎左衛門は浮田善左衛門の一族であろう。小柴金右衛門は安政5年飛越大地震後に常願寺川洪水で使用不能となった田地を復旧する起返勢子方下役に任命されている〔嶋本ほか2008〕。

西ノ番村の金山庄右衛門は、塩の小売人であった（『太田郷土史』）。安政5年飛越大地震後に小柴金右衛門とともに起返勢子方下役に任命されている。また庄右衛門は清塩代銀上納を1か月猶予することを申請し認められている〔嶋本ほか2008〕。忠左衛門・善左衛門・善右衛門・長治郎は、おそらく金山庄右衛門配下の組合頭等とみられるが詳細な史料は見えない。

これら世話人の在住する村は、常願寺川左岸中流に所在し、石工中川甚右衛門の工房が所在する馬瀬口村の下流側に近接している。したがって、この2村の人足は、常願寺川において産出する角閃石安山岩（⑦のD）をはじめとし、このほかの安山岩（⑦のA～Cのいずれか）を「石取」し、工房までの運搬する役割を担ったものと考えられる。また彼らは完成した石材を大岩まで運搬する役割をも担ったのであろう。

日石寺に到着した石材は、この地で組み上げられた。大岩の人足100人は、寺下からの運搬や石組みを行う役割を担った。

最初に挙げられている奥山廻役第8代浮田善左衛門をはじめとする浮田一族は、日石寺の有力な檀家であったと思われる。同様に、組合頭であった金山庄右衛門も塩小売を通じて有力な立場となり、浮田一族同様有力な檀家になりつつあったと思われる。

③石工中川甚右衛門について

中川甚右衛門は、本石塔を製作した石工の名前である。常願寺川左岸上流の馬瀬口村に工房を持つ在郷石工である。

甚右衛門は、四代にわたり常願寺川石工を代表する棟梁として、石造物の製作を続けた。甚右衛門の製作石造物等については、筆者による集成分析がある〔古川 2011a〕。これによれば、甚右衛門は、舟形石仏の光背に初めて祥雲文を配した、初めて笠付円盤形石仏を製作したなどの点において、常願寺川石工における石仏製作の先駆的役割を果たすとともに、卓越した像容は、それまでになかったリアリティを顕出することで、その後の常願寺川石工における伝統的基盤を築いた石工として高く評価

できる。

大岩山日石寺宝篋印塔は、甚右衛門単独作としては最大のものであり、請花など文様刻出などは石仏における技術を用いた製作を行っており、石工技術の高さを示しているといえる。甚右衛門についての考察は後段で行う。

④まとめ

本石塔は11世如龍代に造立された。

石塔造立に関わって人足を寄進した太田本江村加賀藩山廻役浮田善左衛門（のち奥山廻役役儀第8代）、西ノ番村金山庄右衛門をはじめとする世話人は、日石寺の有力檀家と推定される。

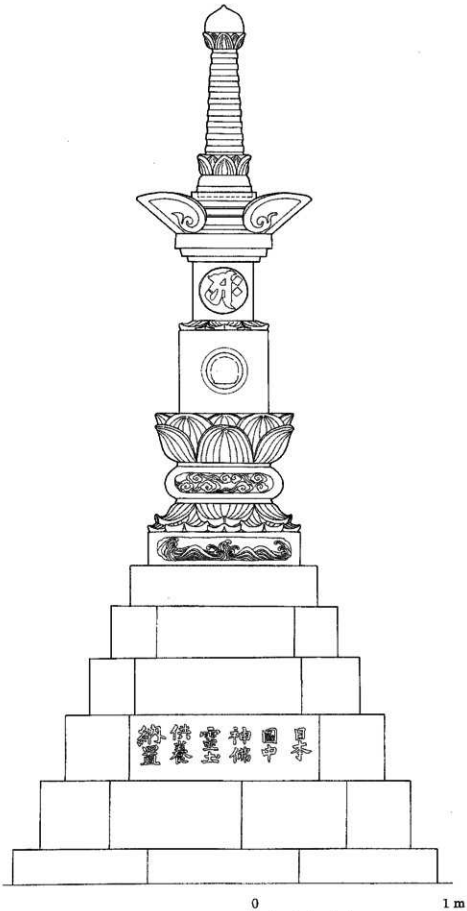
石塔造立の理由は不明である。寺史における大きな行事等が関係していると思われるが、これまでの公式寺史には見当たらない。今後検討が必要である。

本石塔は、馬瀬口村石工中川甚右衛門が単独で製作した宝篋印塔では、最も大型品である。月岡龍高寺宝篋印塔は、本石塔より16.3cm高いが、これは甚右衛門を含めた4人の石工による共作である。

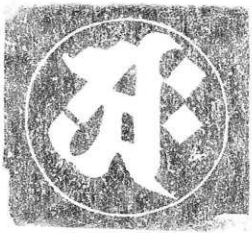
なお中川甚右衛門は、境内の四国西国観音（舟形石仏、境内の4箇所に分散）も上市町平井庄右衛門との共作により製作しており、その調査が望まれる。

注

1　くじがしら。籤引きで持ち回りを決めた組合頭をいう。



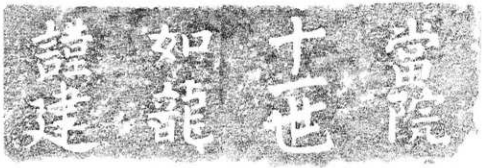
大岩山日石寺宝篋印塔　実測図



軸1　北正面梵字種子
アク　拓影

基壇4段目　北正面　刻銘

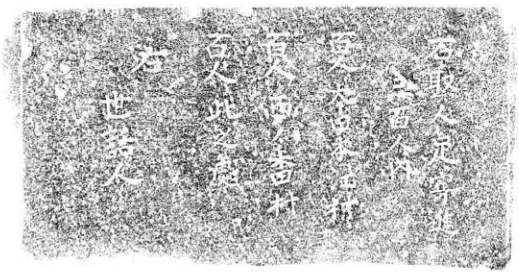
基壇4段目　北正面　刻銘



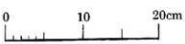
基壇4段目　南面　刻銘

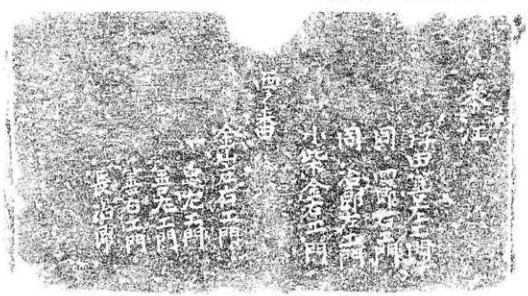
基壇4段目　東面　刻銘

基壇５段目　西面　石工名刻銘



基壇５段目　南面中央右　経緯刻銘





基壇５段目　南面中央左　世話人名刻銘

日石寺宝篋印塔（修復前）　南西から

修復後（同方向）

相輪の折れの補強状況（修復前）

修復後（東から）

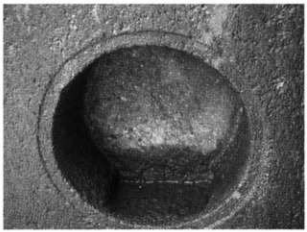
基壇刻銘

相輪の宝珠・請花

相輪伏鉢と笠上面の組合せ

笠　隅飾突起の浮彫文様

軸1　月輪内の梵字種子



軸2円形の彫り込み

軸2彫り込み細部

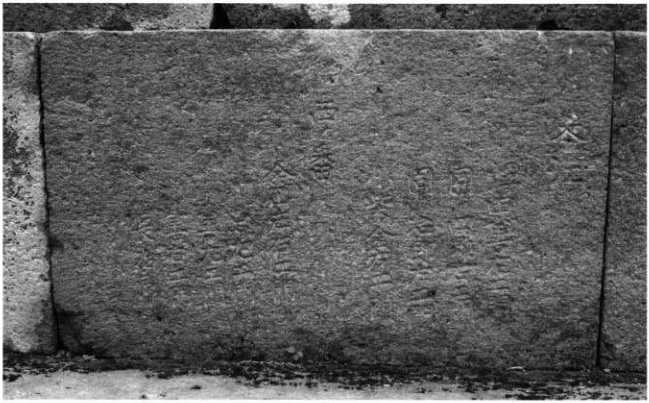
基壇4段目刻銘（南面）

請花・饅頭形・反花・基礎文様（南面）

基壇刻銘【石工名】（西面）

基壇刻銘【造立年】

基壇刻銘（南面1）



基壇刻銘（南面 2）

基壇最下壇の縁取（北東隅）

基壇最下壇の縁取（北東隅）

栗石は百体観音の補強石として再利用

栗石使用状況

4　布金山西光寺境内石造物

(1) 調査の目的　常願寺川石工製作石造物の記録調査
(2) 調査日　平成 24（2012）年 8 月 11 日～8 月 13 日
(3) 調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）
(4) 所在地　富山市中布目
(5) 種別　石造燈籠

(6) 西光寺概要

西光寺は、曹洞宗寺院である。文明 18（1486）年開基の曹洞宗大安寺の後進である。大安寺は、蟹川及勝寺 4 世貫翁龍珠の弟子雪天存康が開山し、明治 3（1870）年合寺令により曹洞宗春日山光厳寺と合併した。明治 6 年大安寺信徒の要望により、有峰西光寺を招致し、現在地に再興した〔高瀬編 1994〕。境内には「稚児塚」と呼ばれる墳墓状遺構が残り、五輪塔が存在する。

また寺域西側に「禅定窟」と呼ばれる地下式横穴が存在する。日韓合併（1910）記念に鐘衝堂を造った時発見され、その階段や鉄の扉を作った〔中村 1963〕。この禅定窟について、昭和 60 年富山市教育委員会が発掘調査を行い、立山開山信仰における「上中入定」思想を具現化した性格を推定した〔富山市教委編 2012〕。

(7) 調査概要

①所在状況　この燈籠は、西光寺境内に所在する。山門から本堂に進む参道があり、その山門寄りの参道両側に同形の各 1 基が所在し、一対として置かれたものである。刻銘がないため年代・経緯等の情報は不明である。江戸時代とみられることから、大安寺の存在した時期に、本堂前や参道のどこかに一対で置かれたものであろう。現在地が当初設置された位置かどうかも不明である。

②全体構成　本燈籠は、安山岩製の割石積基壇とその上に置かれた燈籠本体からなる。燈籠本体は、宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎 2 段・基壇により構成される。主要な構成部材が平面六角形であることから、六角型燈籠に分類される。

本体高さは 6 尺 7 寸 4 分（204cm）、各部位の高さ等寸法は、表 1 に示した。本体石材は、すべて立山天狗山石である。2 基ともに同寸同型式である。

③宝珠　宝珠は半球形で丸みをもち、先端は小さく突出して尖る。請花は主弁 6 弁、間弁 6 弁の 12 弁構成である。各弁は弁脈を表現する。主弁には 6 本の弁脈を刻み、やや立体的となる。伏鉢は六角柱形で、各面は方形であるが上辺は中央が弓なりに下がる。各面一辺の長さ 3.7 寸（11.2cm）、高さ 1.85 寸（5.6cm）で、各面は無文である。

④笠　六角形笠で、屋根は丸みを帯びた緩いむくり形状を示す。軒口は薄く、軒端は内側に斜めに切る。軒反りはなく平らである。角部は、頂部からの下り棟が帯状に隆起して表現され、上面には 3 条の沈線が下る。軒先は丸く巻き込み、蕨手となる。この外面にも 3 条の沈線が続く。蕨手両側面には、沈線で渦巻を描く。蕨手は6個のうち2個しか現存していない。

⑤火袋　横断面六角形で、上下が細くなり棗形である。各面の角は丸い。他の部材の方向とは 30 度ずれて置かれている。

6 面の構成は、火口 2 面、円窓 2 面、貫通しない面

表1 西光寺燈籠本体の規格一覧

部位	高さ		一辺・径	
	寸	cm	寸	cm
宝珠	10	30.3	7.3	22.1
笠	7	21.2	13.2	40
火袋	10	30.3	5.6	17
中台	5.3	16	9.4	28.5
竿	17.7	53.6	13	39.5
基礎1段目	7.1	21.5	10.5	31.8
基礎2段目	5.9	17.9	12.5	37.9
基壇	4.4	13.2	15	45.5
計	67.4	204		

2面で、各面は中心に対し相対している。

火口は2段に彫った縦長方形で、内側が貫通する。内寸は長辺 4.4 寸（13.3cm）短辺 2.8 寸（8.5cm）である。

円窓面は、火口左側に位置し、2 段に彫った円形で、外寸径 13cm、内寸径 10.4cm である。西側円窓は内寸部分が円形に貫通している。東側の円窓は上半が三日月形の貫通窓である。

表2 中台における祥雲文の構成

面（東面を基準とする）	ブロック数	ブロックごとの祥雲数			ブロックごとの祥雲の尾の方向		
		左	中	右	左	中	右
東面（基準）	3	3	2	3	右	左	左
右1	2	3		3	左2＋右1		右1＋左2
右2	2	3		2	左		右
裏面	1		4			左3＋右1	
左2	2	3		3	右		左
左1	2	3		3	右		右

貫通孔がない部分の外面には縦長の菊花文が浮彫りされる。中央に径 3 寸 16 弁の花弁をあらわし、花芯は円形である。菊花の上下余白には唐草が 2 本ずつ配置される。火袋内面は粗い整形である。

⑥中台　上段の火袋受座は、6 面ともに額内に祥雲文浮彫文様を施す。各面の祥雲文の文様構成は 6 面全て異なっており、祥雲のまとまり・まとまり毎の個数・尾の方向によって区分される（表 2）。

下段は請花で、主弁 6 弁間弁 6 弁の 12 弁構成である。弁先端は尖って反り、弁端部には浅い縦溝をもつ。弁脈は 10 本で、やや立体的である。間弁は大形で、主弁と同じ造形である。

⑦竿　断面円形で、中央に断面が丸い節を廻す。中央から上下端に向かって径が太くなり、上端径 10.3 寸（31.2cm）、下端径 13 寸（39.4cm）、中節径 8.6 寸（26.1cm）、竿部最小径 7.2 寸（21.8cm）である。銘はない。

⑧基礎　六角柱形である。中央で 2 石に分割し組合せている。側面は浅く額を彫り込むが、額内は無文である。

⑨基壇　六角柱形である。3 石に分割し組合せている。側面の左 3 分の 1 のところで分割されている。側面は、3 辺の縁取を平面加工し、内側はハツリ痕を残して意匠とする。下端面は、下の割石積基壇の石材の形に合うように刳り込み加工されている部分がある。

⑩割石積基壇　六角柱形で、下部が広がる。上端幅 53cm、下端幅（接地面）93cm、高さ 48cm で、10～50cm 大の安山岩割石を合端を合わせながら積んでいる。

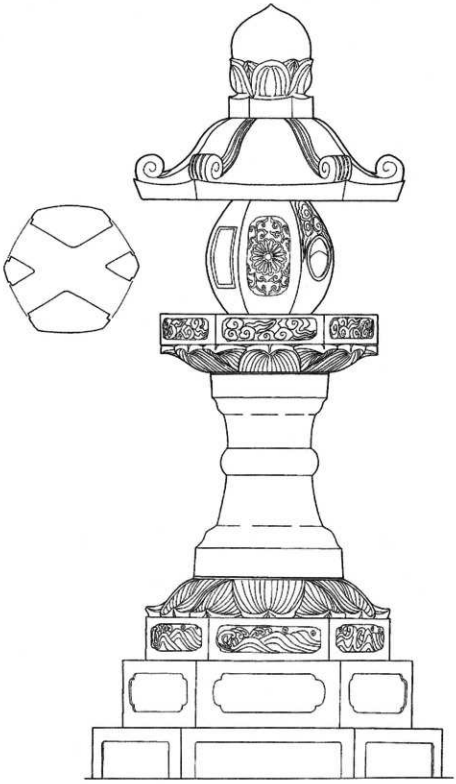
(8) 考察

本燈籠の型式である六角型燈籠は、平安時代以来最も多く作られた一般的な形態とされているが、常願寺川・神通川流域においては、自然石を使った山燈籠や、神前型に分類される四角型燈籠が主流であり、六角型燈籠は極めて少ない。この意味で、本寺の装飾性の高い燈籠は特異な存在といえる。

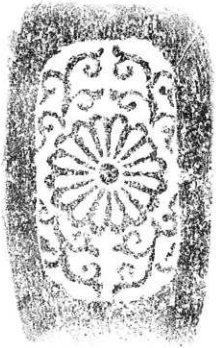
在郷石工である常願寺川石工・神通川石工や富山町石工は、宝篋印塔・石仏等の装飾文様として、祥雲文・波涛文を多用し、ほかに動物文・龍文・花文（蓮華・牡丹）・唐草文を使用した。本燈籠には、祥雲文・波涛文・唐草文が使われており、前記石工らの意匠と共通した特徴を示す。本燈籠では中心的な文様として菊花文があり、これは他に例がない。一方、使用された石材は、常願寺川産の立山天狗山石である。主石材が安山岩製の山燈籠・四角型燈籠では、石工を問わず、ほぼ例外なく火袋に立山天狗山石を使用している。この火袋には、火口・円窓が彫られるが、それ以外の文様はまず彫られない。装飾文様のある火袋の存在は、例外的な存在である。

以上の状況は、本寺燈籠が常願寺川石工・神通川石工・富山町石工のいずれかの石工により製作された可能性を示すものの、いずれの石工製品においても型式上例外的な存在であることから、製作石工の同定は困難を伴う。その候補として挙げられるのは、常願寺川石工のうち馬瀬口村の中川甚右衛

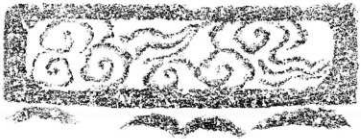
門である。甚右衛門は石仏以外に宝篋印塔を多く製作し、祥雲文・波濤文を主意匠として多用し、弁脈のある蓮弁表現を多く使用する〔古川 2011a〕。また、富山城下町曹洞宗光厳寺池上家墓石や射水市加茂中部海扇寺法華経塚碑において、他に類例のない特異な形状・意匠の石塔を製作しており、特殊品の製作実績がある。以上のことから、ここでは中川甚右衛門が製作石工であり、文様意匠からみて19世紀前半、文化文政期頃の作と推定しておきたい。



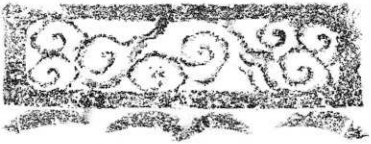
西光寺燈籠　実測図



火袋側面　菊花文浮彫



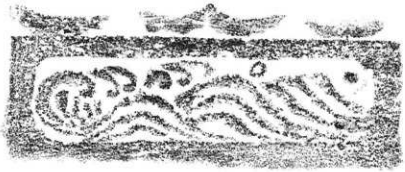
中台　祥雲文浮彫（正面）



中台　祥雲文浮彫（右１面）

火袋円窓（三日月形窓）
祥雲文浮彫

基礎　波濤文浮彫（右１面）



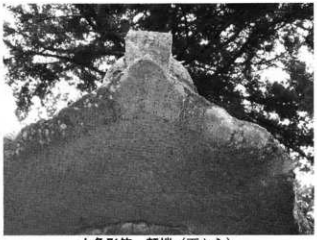
基礎　波濤文浮彫（東正面）

0　10cm

西光寺燈籠　実測図

西光寺境内の六角型燈籠（南東から）

宝珠・六角形笠



六角形笠　軒端（下から）

六角形笠　下り棟先の蕨手正面

火袋側面の菊花文・唐草文浮彫

火袋円窓上部の浮彫文様（祥雲文）

火袋円窓（三日月形）

中台側面の浮彫文様（祥雲文）

竿

基礎上部の蓮弁

基礎の蓮弁と格狭間

基礎・基壇

割石積基壇

Ⅱ　市内木造彫刻調査

１－１　医王山東薬寺蔵狛犬等

(1)調査の目的　保存状況把握のための記録調査

(2)調査日　平成 22（2010）年 6 月 23 日

(3)調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）、松浦正昭（前富山大学教授）

(4)所在地　富山市牧野

(5)種別　木造彫刻（2 件 4 点）

(6)経過

東薬寺には、指定を受けていない狛犬一対（阿形・吽形）と仏像台座 2 基が所蔵されている。

獅子狛犬一対は東薬寺に伝来したものであるが、当寺に所蔵されることになった経緯の詳細は不明である。『越中の彫刻』（長島 1975）の紹介では、「杉材の一木造で、鎌倉時代の作」とされている。仏像台座についての調査は行われていない。

東薬寺では、これまで宝篋印塔の調査、及び当寺所蔵の木造彫刻・金属仏具等の調査を行ってきており、今回その一環として頭書の 2 件 4 基について調査を行った。

なお、調査にあたっては、富山大学教授（当時）松浦正昭氏に立会っていただき、各種指導を得た。

(7)狛犬一対の概要

相対する狛犬で、一方は口を開け、もう一方は口を結んでいるので、前者が阿形、後者が吽形の一対をなすものである。阿形の顔はやや左を向き、吽形はわずかに右を向く。

全体的な容姿は、やや前のめりで、盛り上がった胸を前方向に張り、胴は細い。前脚は後脚より離れて前にあり、直立するため、やや猫背である。鬣は巻毛の表現が顕著である。容貌は、くぼんだ目と上方に尖った鼻が特徴的である。尾部は欠失するものもあり不明である。全体的に虫食いや欠損が多く、また表面も磨耗欠損が認められ、遺存状況は不良である。

①阿形

一木造で、内刳はない。素地仕上げで着色痕跡は認められない。

頭部はやや大きめである。丸い目は、周囲を彫りくぼめて表現する。耳は小さい。

上顎部の歯列は、鋸で削り取った痕跡があり、当初の形状を留めていない。両脚先は欠失している。

像高は現況高で 69cm、復元すると 76.8cm と推定される。背面の後足から胸まで 60.3cm である。背面部材を除き、後足から胸までの長さは 43.4cm である。

木取は、後頭部から腹部やや前方に通る木芯の一材から、胸から両後肢半ばまでを彫出する。

後脚背面より尾部に至る部分に、縦材（前後 17.5cm、左右 20.3cm）を矧付けている。

尾部材矧付面中央には、9.7cm×7.2cm 深さ 4.8cm の楕円形の窪みを穿つ。同じ面に長方形の枘穴 2 つが残る。

放射性炭素年代測定及び樹種同定のため、本体末端の年輪が最も外側の部分から木片を採取した（p77 参照）。

②吽形

一木造で、内刳はない。素地仕上げとしており着色は認められない。両脚先を欠失している。左脚は上部から別材を継いでおり、欠失後の現状高さに合わせている。

頭頂部に角はない。鼻が特に強調されている。

像高は 65.1cm。背面後補部を除く後肢面から胸までは 41.4cm である。

木取は、木芯を後頭部後方にわずかに外している。腹部中央に込めた一材から、後肢端までを彫出している。

背面の現状部材は後補である。

(8)木造邪鬼座・岩座の概要

①四天王邪鬼座

仰向けになった踏みつけられた邪鬼の上半身が彫られていることから、四天王の台座（邪鬼座）であることがわかる。丸くくぼんだ目が特徴的である。彩色はない。

上面には四天王本体の足下面の枘を差し込むため、長方形の枘穴 2 か所が穿たれている。

一材で彫出したもので、横幅 54cm、奥行 31.2cm、高さ 11.8cm である。上面奥部や裏面の虫食いが顕著で、遺存状況は不良である。

材質は針葉樹であり、目視ではヒノキと推定される。

平安時代後期（11～12 世紀）と推定される。

②十二神将系天部像岩座

岩座であり、十二神将系天部像の台座と推定される。彩色はない。

上面には四天王本体の足下面の枘を差し込むため、長方形の枘穴 2 か所が穿たれている。

一材で彫出したもので、左横上部と右奥上に小材を継いでいる。欠損を補ったものか、あるいは別像を置くため継ぎ増ししたものかは不明である。

継材を含めない寸法は、横幅 43.2cm、奥行 19.6cm、高さ 11.8cm である。

材質は針葉樹であり、目視ではヒノキと推定される。左右端面の虫食いが顕著で、遺存状況は不良である。

製作年代は平安時代後期（11～12 世紀）と推定される。

(9)小結

木造狛犬一対のうち、阿形本体は、後述するように、放射性炭素による年代測定により平安後期（11 世紀前半から 12 世紀中頃）であることが判明した。この年代は、概ね木材伐採年代であり、製作時まで相当時間経過した場合（例えば再利用等）、製作年代とは大幅に異なってしまう。

本狛犬は、これまで鎌倉時代作とされており、年代測定結果とは少なくとも約 50 年、最大約 200 年の開きが生じることになる。

本狛犬は、最も顕著な形態上の特徴点として、細い体躯と前のめりの姿勢が挙げられる。これらの特徴は、これまで一般的に鎌倉期以降の特徴と理解されてきたものであり、平安後期の特徴としては、背筋を垂直に近く立て、後脚で前脚を抱え込むような体勢になると指摘されてきた〔上杉 2001〕。この形態的特徴から見ると鎌倉以降に下る様相であることが追認される。

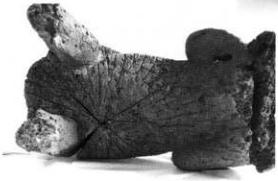
一方、作風から見ると、鬣の巻毛や容貌は優美な表現であり、スリムな体躯はバランスのよいのびやかさを示す。このような特徴は、運慶様式と呼ぶ鎌倉初期以降の作風であるといえる。

以上のことから、モクレン属の原材は、平安後期～末頃に切り出され、間をおいて、鎌倉初期に狛犬として製作されたと理解するのが妥当であろう。ただし、平安後期とされる狛犬の一部には、本狛犬のようなスリムな体躯をもつ例もあることから、本狛犬が測定年代に近い平安後期に遡ることもありうることを付記しておくこととし、製作年代の研究は今後に委ねたい。

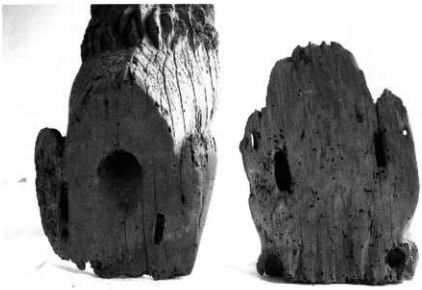
狛犬1対

阿形側面観

阿形背面観



阿形木取（腹面）



阿形体部・尾部　接合面　　各面にくぼみ・ホゾ穴あり

吽形側面観

吽形背面観

吽形木取（腹面）

四天王邪鬼座　前面観

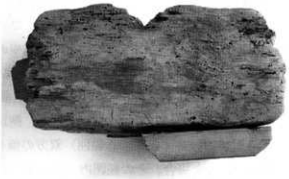
四天王邪鬼座　邪鬼顔面部分

四天王邪鬼座　上面観

四天王邪鬼座　下面観

十二神将系天部像岩座　上面観

十二神将系天部像岩座　前面観



十二神将系天部像岩座　下面観

1－2　医王山東薬寺所蔵木造獅子狛犬の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　試料

試料は、東薬寺所蔵の運慶様式の木造獅子狛犬 1 対（阿形・吽形）である。提供資料によれば、阿形および吽形のいずれも芯持材の一木から製作されている。また、阿形および吽形の獅子狛犬は、それぞれ尾部が別材で製作されており、吽形の獅子狛犬は半裁木を補修材とする様子が確認できる。

分析に供された試料は、木造獅子狛犬の阿形の本体尾部と同尾部の別材から採取された木片各 1 点（阿形・本体尾部;試料№1、阿形・別木尾部;試料№2）、吽形の本体脚部より採取された木片 1 点（吽形・本体脚部;試料№3）の計 3 点である。

本分析では、木造獅子狛犬の年代および樹種の検討を目的として、放射性炭素年代測定および樹種同定を実施した。

2　分析方法

①放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ^{13}C/^{12}C の測定も行うため、この値を用いて δ^{13}C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、2σ（σは統計的に真の値が 68%、2σは真の値が 95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

②樹種同定

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3　調査結果

(1) 放射性炭素年代測定

木造獅子狛犬から採取された木片の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、阿形・本体尾部（試料№1）が 970±20yrBP、同・別木尾部（試料№2）が 1,190±20yrBP を示す。また、較正暦年代（測定誤差σ）は、阿形・本体尾部（試料№1）が calAD 1,022-calAD 1,147、同・別木尾部（試料№2）が calAD 782-calAD 882 である（表 1）。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表 2 に示す。木造獅子狛犬から採取された木片は、全て広葉樹のモクレン属に同定された。以下に解剖学的特徴などを記す。

・モクレン属（*Magnolia*）　モクレン科

散孔材で、道管は単独または 2-4 個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1-2 細胞幅、1-40 細胞高。

表1. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代		相対比	測定機関 Code No.
試料No.1 東薬寺狛犬 阿形・本体尾部 木片(モクレン属)	970±20	-24.73±0.55	971±24	σ	cal AD 1,022 - cal AD 1,045	0.496	IAAA-113292
					cal AD 1,094 - cal AD 1,120	0.406	
					cal AD 1,141 - cal AD 1,147	0.098	
				2σ	cal AD 1,017 - cal AD 1,057	0.42	
					cal AD 1,076 - cal AD 1,154	0.58	
試料No.2 東薬寺狛犬 阿形・別木尾部 木片(モクレン	1190±20	-29.33±0.56	1188±24	σ	cal AD 782 - cal AD 789	0.105	IAAA-113293
					cal AD 810 - cal AD 882	0.895	
				2σ	cal AD 773 - cal AD 895	0.988	
					cal AD 927 - cal AD 935	0.012	

表2. 樹種同定結果

試料No.	名称	部位	木取り*	試料採取位置	種類(分類群)
1	東薬寺狛犬 阿形	本体尾部	芯持材(一木削出)	辺材部	モクレン属
2	東薬寺狛犬 阿形	別木尾部	—	—	モクレン属
3	東薬寺狛犬 云形	本体脚部	芯持材(一木削出)	—	モクレン属

＊木取りは、提供資料の確認結果に基づく

4　考察

(1) 木造獅子狛犬の年代

東薬寺所蔵の木造獅子狛犬（阿形）は、放射性炭素年代測定結果に基づく較正暦年代（測定誤差σ）を参考とすると、阿形・本体尾部（試料№1）が 11 世紀前半～12 世紀中頃、阿形・別木尾部が 8 世紀後半～9 世紀後半に相当する。分析に供された狛犬は平安時代末頃に遡る運慶様式の資料と想定されているが、阿形・本体尾部は一木の辺材に相当する部分より採取されていることなどを踏まえると、今回の結果は上記した所見を支持すると考えられる。一方、別木尾部は、本体尾部よりも古い年代を示した。この点については、別木の木取りや履歴などを含めた検討が望まれる。

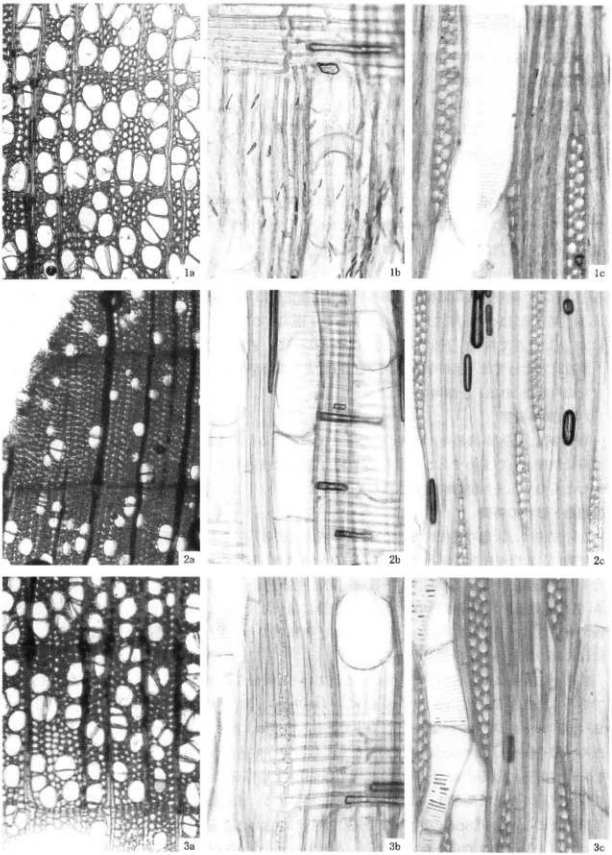
(2) 木造獅子狛犬の樹種

東薬寺所蔵の阿形および吽形の 1 対の木造獅子狛犬の本体は、上述したようにいずれも後頭部から腹部に樹芯が通る一木から製作されている。これらの狛犬は、樹種同定結果から、阿形・吽形ともに落葉広葉樹のモクレン属を利用したことが明らかとなった。また、阿形・別木尾部もモクレン属であったことから、本体と同じ木材の利用が示唆される。

狛犬に確認されたモクレン属には、ホオノキ、シデコブシ、コブシ、タムシバ、オオヤマレンゲなどの自生種や、モクレン、ハクモクレンなどの渡来種や園芸品種が含まれる。木材組織から種を分類することは困難であるが、山中で普通にみられること、大径材が得られることなどから、ホオノキの可能性が高い。ホオノキは、谷沿いなどの肥沃地に生育する落葉高木であり、大きい個体では樹高 30m、直径 1m に達するとされ、樹幹は真っ直ぐに伸びることが多い。木材は広葉樹の中では軽軟な部類に入り、緻密で切削などの加工が容易とされ、木理が通直で割れや狂いが少ないことから器具材、装飾材、彫刻材および家具材などに広く利用される。

狛犬の調査事例については、大野湊神社（石川県）の応永 12（1402）年の作とされる寄木造の狛犬の内刳り面から採取された木片が針葉樹のアスナロに同定されている（楽浪文化財修理所,2006）。一方、仏像・神像などの調査事例では、富山県内では常楽寺（富山市）所蔵の平安時代中期の作とされる木造聖観音菩薩立像がホオノキに同定されている（小原 1964）。なお、ホオノキを用いた事例は全国的にみても数が少ないが、この他に愛宕神社所蔵の兜跋毘沙門天像（岩手県）、中村観音堂所蔵の観音菩薩像（山形県）、観音寺所蔵の十一面観音像（島根県）、金剛寺所蔵の矜羯羅童子像（東京都）などに確認できる（小原 1964・1972、伊東 2002）。このうち、金剛寺所蔵の矜羯羅童子像は、平安時代の作とされていることから、少なくとも当該期の木造彫刻にホオノキ（モクレン属）が利用されていたことが窺える。

阿形体部　年代測定・樹種鑑定試料採取部位



1. モクレン属(試料No.1)
2. モクレン属(試料No.2)
3. モクレン属(試料No.3)
a:木口, b:柾目, c:板目

200μm:a
100μm:b, c

2　五穀山龍高寺蔵岩峅寺衆徒円城坊寺位牌

(1) 調査の目的　性格把握のための調査

(2) 調査日　平成 23（2011）年 11 月～12 月

(3) 調査者　古川知明（埋蔵文化財センター所長）

(4) 所在地　富山市月岡 6 丁目　真言宗五穀山龍高寺

(5) 種別　寺位牌

(6) 経過

ここで紹介する木造寺位牌は、真言宗五穀山龍高寺（古川章賢住職、富山市月岡町 6 丁目）に保管されているもので、立山雄山神社前立社壇の神宮寺立山寺（通称）岩峅寺二十四坊の一つ、円城坊家の子孫である龍高寺檀家佐伯氏が同寺に保管を依頼したものである。

龍高寺は江戸時代において、岩峅寺衆徒二十四坊の子女らが死去した際葬祭を執り行った寺院であるとされる。同寺過去帳に掲載のある岩峅寺坊関係者は 20 坊 300 人で、過去帳掲載者の 12%にも及ぶ。寛正元（1460）年六角坊から始まるが、増加するのは寛永元（1624）年以降である。坊住職は 61 人に及んでおり、子女に限らないことがわかる。円城坊は子女 4 人の掲載がある。

調査にあたっては、龍高寺過去帳、立山町教育委員会が実施した岩峅寺衆徒宿坊家の悉地調査結果〔立山町教委 2012〕を参考にした。

(7) 寺位牌の概要

寺位牌は、檀家が檀那寺に供養の布施とともに納める位牌をいう。寺では本堂などに安置し、勤行の際に供養されるものである。本寺位牌は、円城坊の先祖代々にわたる血縁者 29 人の法名・忌日を記したもので、先祖位牌に区分される。

①規格・形状の特徴

この位牌は、大形の板位牌で、計 29 人の戒名（法名）等を記載する。

本位牌は、大形の板を札板とする板位牌に区分される。6 つの部材により構成し、これをホゾ穴で組合せて 1 個体とする。上から、笠・札板・請花・茄子座・框の順となる。

A 笠　破風形式の屋根形の笠である。全体に前傾している。三角屋根で、切妻形破風となる。2 段で表現され、下段は破風板を示したものか。破風板の合掌部分には、懸魚が刻出される。その中央には八葉の花形の円形彫刻を付ける。

裏面上部中央には、小さな丸釘が打込まれている。明治以降固定するために新た打ち込まれたものであろう。高さ 3.3 寸（10cm）、幅 12.8 寸（38.7cm）、奥行 1.5 寸（4.5cm）である。

B 札板　法名が書かれている位牌本体である。構造は、厚さ 1.1cm の 1 枚板で、下部を差込みのため、幅を狭くしている。頭部は両肩を丸くし、笠へ差込む部分をつくっている。その分の高さは 1.5cm である。札板面は、上端幅 10.2 寸（31cm）、下端幅 9.7 寸（29.4cm）で、下がわずかに狭い。札板面として有効な長さは、32.8 寸（99.4cm）である。差込部は上端幅 11.7cm、下端幅 11cm で、下部中央に 1.4cm×0.8cm のホゾ穴がある。差込部を含めた全長は、116.3cm となる。板の左右両側には、幅 1.5cm 厚さ 6.6mmの細い板が 4 カ所釘留され、厚みをもたせている。

札板面には縦横の区画線が引かれ、区画内に法名・忌日が 3 列に書かれる。最下段の縦線は、板面の下いっぱいまで到達せず、下端から 2cm 程度上で止まっている。また、左右の細い板も下端から 2.8cm 上で途切れている。よって、最下段の下にある請花の上に、高さ 2.8cm の別部材がかつて存在したか、あるいはやや見栄えが悪いが空白となっていたと考えることができる。

C 請花　上端は横幅 11 寸（33.3cm）、高さ 1.85 寸（5.6cm）、奥行 2.4 寸（7.3cm）、下端は横幅 8.6 寸（26cm）、奥行 1.3 寸（3.9cm）である。上面に札板を受ける幅 29.8cm、奥行 2.0cm、深さ 3mm の窪みを設け、その中央に幅 12cm、奥行 1.2cm のホゾ穴を開けている。この穴に札板下部の差込部を差し込む。正面は、蓮弁文様を彫る。主弁は巾弁 5 葉で、横に並べ、弁の間には子弁 4 葉を配し、計 9 葉である。主弁は横長で、先端は尖る。弁中央は縦に稜をもつ。

D 茄子座　2 段の段形茄子座と長方形板の 2 つの部品からなる。段形は、幅 8 寸（24.2cm）、奥行 1.4 寸（4.2cm）、高 0.5 寸（1.5cm）である。中央には札板差込穴が貫通する。

長方形板は、幅 7.3 寸（22.1cm）、奥行 1 寸（3.3cm）、高 0.2 寸（0.7cm）である。中央には札板差込穴が貫通する。この板は、高さを調整する目的で加えたものか。

E 框　下端がやや広がる台形状となる。上面には 5 段になる段型の受け座を刻出している。各段の横幅は、下へ向かい 1 寸刻みで大きくなる。最上部の段は、横幅 8.3 寸（25.3cm）、奥行 1.5 寸（4.5cm）である。受け座部分を除いた框本体部分は、高さ 4.85 寸（14.7cm）、上端幅 12.4 寸（37.6cm）、奥行 3.6 寸（10.9cm）、下端幅 12.8 寸（38.8cm）、奥行 3.8 寸（11.5cm）である。正面と両側面の隅角辺には、幅 5mm で浅く削り取り、側辺を縁取りしている。

F 全体概要　以上各部位をみてきたが、全体についてみると表 1 となる。佐伯家寺位牌は、6 材からなり、大型の札板部に漆で区画線が引かれ関係法名が書かれる。総丈 4 尺 2 寸 7 分（129.4cm）、札幅 1 尺 1 分（30.5cm）、台幅 1 尺 2 寸 8 分（38.8cm）の板位牌で、正面全体に赤もしくは黒の漆が塗られた痕跡が認められ、塗り位牌に分類される。

②記載法名について

A 概要　札板表面には、縦横の線が引かれることにより、縦 7 段、横は最上段 5 列、2 段目以下は 6 列に区分されている。最上段は梵字種子が墨書されている。したがって、法名を記載する枠は、縦 6 段横 6 列の 36 人分がある。このうち実際に法名が記載されているのは、29 人で、その内訳は、2 段目 4 人、3 段目 6 人、4 段目 4 人、5 段目 6 人、6 段目 6 人、7 段目 4 人である。

枠と法名は、漆により書かれており、板面から少し盛り上がる。

札板に書かれた法名のうち、最も新しいものは、文政 10 年(1827)年である。

B 梵字種子について　1 段目の梵字種子は、5 文字があり、左から、タラーク、ウン、バン、不明、アクの順である。これらは金剛界五仏のうち 4 仏である。

以上の内容から、未解読である左から 4 つ目の梵字種子は、阿弥陀如来を示すキリークと推定される。

C 段区分と記載者　6 段に区分された法名は、段毎にまとまりをもつ。法名は、右から左へ記載されている。これらは位号等により区分されるほか、区分毎に年代順に記載されていることから、これらを以下の 4 つに大別することができる。

表1 佐伯家寺位牌規格一覧

部位	高		幅		厚		材数	木取
	cm	寸	cm	寸	cm	寸		
笠	10	3.3	38.7	12.8	4.5	1.5	1	辺材、柾目取り
札板	96.7	31.9	30.5	10.1	1.8	0.6	1	赤味芯去り材、板目取り
請花	5.6	1.85	33.3	11.0	7.3	2.4	1	辺材、柾目取り
中軸	2.4	0.8	24.3	8.0	4.2	1.4	2	辺材、柾目取り
框	14.7	4.85	38.8	12.8	11.5	3.8	1	芯持ち角材、正面板目
計	129	42.7					6	

Ⅰ　祖師

2段目の4人である。この4人は、『立山寺院主世代記帳』(1)によれば、「当山四祖」とされ、薬勢大上人・慈朝大和尚・慈興大上人・慈範大上人の順で記される。

慈興上人は、立山開山伝承の中心人物である佐伯有頼が出家後に名乗った位号であるとされる。忌日は和銅7（714）年説と天平宝字3（759）年の2説があり、ここでは和銅7年となっている。

薬勢上人は慈興上人の師とされる。芦峅寺和真坊本『立山略縁起』では、有頼が仏を危めた罪を悔いて自害しようとしたとき止めた人物が薬勢仙人とする。『立山寺院主世代記帳』によれば、文殊菩薩の後身で、説法ヶ原の五智灌頂院を開山したとする。説法ヶ原は、現富山市原（極楽坂スキー場付近）の東側にあったと伝える〔大山町 1960、山元 2000〕。

慈朝和尚については、『立山略縁起』に、薬勢仙人が有頼に対し、僧侶慈朝の弟子となるよう勧めたとあり、慈興上人の師である。岩峅寺円城坊墓地の墓碑には「慈朝上人」と表記される。『立山寺院主世代記帳』によれば、無尽意菩薩の後身で、薬勢上人の弟子である。龍樹菩薩の化身ともいう。

慈範上人は、『立山寺院主世代記帳』によれば、慈興上人の弟子であり、薬勢上人の生れ変りである。天平宝字3年83歳で没した。慈興上人天平宝字3年没説は慈範上人と混同されたとみられる。

Ⅱ　住職

3・4段目の僧籍者で、10人が記載される。このうち9人が岩峅寺二十四坊墓地内に墓石の存在が確認されている〔立山町教委 2012〕。墓石はすべて円城坊墓地に認められる。

岩峅寺では、二十四坊において、輪番により院主・長吏・大勧進が置かれ、寺を管理した。院主は代表する住持職、長吏はこれを補佐し寺務を司る職、大勧進は維持管理等のために寄付集めを主務とする職である。その他の坊は宗徒とされた。

法印栄心は長吏、法印秀清は院主であった。『立山寺院主世代記帳』には、秀清は「秀清大和尚　寶暦四年二月三日」（1754）、栄心の記載はない。『当山院主世代記写』(2)には、秀清は「院主阿闍梨権大僧都秀清法印大和尚　宝暦四年二月三日寂」、栄心の記載はない。両文書とも忌日等記載内容が正確である。以上により、寺位牌に記載された役職については、信憑性が高いものと考えられる。

Ⅲ　住職室

5段目の大姉・信尼・禅定尼の位号をもつ女性6人である。1人目の「栄珊禅定尼」は、岩峅寺円城坊墓地において、住職弘慶と同じ墓石（立山町調査 G4-54）に法名があることから、この2人は夫婦関係にあるとみられる。このことから、この段は住職の室が列記されているとみられる。

以後の5人は、年代を追って書かれるが、これに対応する住職9人と一致せず、夫候補者が2～4人となり、夫婦関係を同定するのは困難である。

岩峅寺円城坊墓地内の墓石において確認されているのは、6人のうち4人である〔立山町教委 2012〕。

Ⅳ　血縁者

6・7段目の各種位号をもつ男女9人である。位号とその人数は、大姉3人・信士1人・信女2人・童子1人・童女2人である。9人のうち男性は2人である。岩峅寺宿坊墓地内の墓石〔立山町教委 2012〕において確認されているのは、9人のうち5人であり、いずれも円城坊佐伯家の墓地に所在することから、当坊住職・室以外の血縁関係にある人々と考えられる。

D　記載方法　札板への記載は、漆書きにより完成（**表2**）しているが、詳細にみると、下に墨書きが残っている（**表3**）。

墨書きがあるものは、2段目から7段目の右1人目までであり、7段目の残り2人は、墨書きなしに漆書きされている。また、墨書きでは記載があるが、漆書きでは文字抜けや墨書きと異なる年号等

を書いたものが複数箇所ある。

したがって、墨書きは、漆書きのための下書きではなく、当初墨書きで作成していたものを、後年漆書きに追加変更したものと考えられる。

これにより墨書きと漆書きの２つのデータを合わせたものが**表４**である。
また、前段で見たように、Ⅰ～Ⅳの大別毎に、原則忌日順になっているが、Ⅱ・Ⅳにおいては、一部忌日順が逆転している現象がみられる。

Ⅰにおいては、２度の逆転がある。１つ目は、３段目の栄心と秀玄の間である。２人ともに権大僧都法印の位号をもつので、この順は、住職在任順であることがわかる。２つ目は、３段目末の秀清と４段目頭書の栄歓である。したがってこれも在任順とみられる。

Ⅳにおいても、２度の逆転がある。１つ目は、６段目の右から４人目と５人目の間で発生している。２つ目は、７段目の最後の童子号の１人である。この間に含まれる４人においては、忌日順になっていることから、これらはまとまりがあると推定できる。このうち春山清空信士は、現在岩峅寺円城院佐伯家墓地に墓石が存在するので、抜け落ちたなど何らかの理由により後で追加されたとみられる。

最後の賢空海童子は、忌日がⅢの賢応寿保大姉と忌日が同じであり、同時に死去したことがわかる。また法名に同じ「賢」の字が用いられていることから、賢応寿保大姉の息子と考えられる。童子は通常18歳未満の男子の位号であり、出産に伴う母子の死去ではないことから、病気等や不慮の事故により２人同時に亡くなったとみられる。

以上のことから、この位牌が墨書きから漆書きに変更された時期は、墨書きの末年である文政２年（1819）以降で、墨書きのない文政10年までの間と推定される。

E　龍高寺過去帳との照合について　龍高寺が所蔵する過去帳には、岩峅寺二十四坊のうち、20坊の住職とその家族が掲載されている。このうち円城坊関係者は４人であり、年代は慶安２（1649）年から明和５（1768）年に及ぶ（**表５**）。位号は、大姉・童子・童女である。しかしながらこの４人の法名は、この位牌に見当たらず、また岩峅寺円城坊墓地その他坊家墓地〔立山町教委 2012〕にも見当たらない。

F　岩峅寺円城坊墓地の墓石との照合について　岩峅寺二十四坊家の墓地調査が立山町教育委員会により行なわれ、墓石の刻銘等が明らかにされている〔立山町教委 2012〕。これによれば、円城坊の墓地は、立山町岩峅寺に所在する。この墓地は新設されたもので、旧地から移転してきたものが多い。旧地はA-6 地点と推定されている。この移転に伴い、いくつかの墓石は欠落し、再建したものもある。立山町教育委員会の調査では、円城坊墓地はG４地区の墓石番号 45～97 の 53 基で、うち１基は先祖墓碑銘である〔立山町教委 2012〕。墓地中央にある墓石には、「円城坊累代之墓」と記され、その上に家紋「丸に違い鷹の羽」が彫られている。ここに存在する墓石のうち、位牌に見える法名と一致するものは、先に見たとおり、計 18 人 17 基である。このうち、忌日が位牌と異なるものが２件、位号が異なるもの１件、法名が異なるもの２件が存在する（**表６**）。この違いのうちいずれが正しいかについては、遅くとも本人が死去して数年以内に製作された墓石に記載されている方が、同時代性が高く信頼性が高いことから、位牌において転記の際誤って書かれた可能性が高いと判断される。

表５　龍高寺過去帳掲載の円城坊関係者

忌日			法名	付記等
和暦	西暦	月日		
慶安2	1649	2,13	光獄妙円大姉	岩峅円城坊
寛文3	1663	10,24	信教妙■■■	岩峅円城坊
明和4	1767	11,14	法清童子	岩峅円城坊コドモ
明和5	1768	1,13or18	英山妙心童女	岩峅円城坊

■は不明文字

表6 位牌記載者情報

番号	位号・法名	忌日			下書墨書	立山町調査報告番号	墓石種別	備考
		和暦	西暦	月日				
1	慈節上人			4月21日	○	G4-52	墓碑のみ	
2	栗勢上人				○	G4-52	墓碑のみ	
3	慈朝和尚				○	G4-52	墓碑のみ	上人
4	慈興上人	和銅7	714	6月14日	○	G4-52	墓碑のみ	
5	権大僧都法印弘慶	慶安3	1650	12月15日	○	G4-54 忌日「14日」	自然石	栄珊と一石墓石
6	権大僧都円学	元禄4	1691	6月15日	○	G4-55 「權少僧都」	無縫塔	
7	権大僧都弘清	元禄11	1698	7月17日	○	G4-50	尖頂方形	
8	長吏権大僧都法印栄心	正徳2	1712	1月14日	○	G4-67	無縫塔	
9	権大僧都法印秀玄	宝永4	1707	7月18日	○			
10	院主権大僧都法印秀清	宝暦4	1754	2月3日	○	G4-51	五輪塔	
11	権大僧都栄歓	宝暦1	1751	3月25日	○	G4-79 「栄観」	無縫塔	
12	権大僧都栄光	安永8	1779	1月5日	○	G4-66	尖頂方形	
13	権大僧都秀運	文化8	1811	7月17日	○	G4-80	尖頂方形	
14	権大僧都法印栄充	文政2	1819	1月20日	○	G4-57 忌日1月10日	無縫塔	
15	栄珊禅定尼	承応3	1654	8月15日	○	G4-54 「栄瑞」	自然石	弘慶と一石墓石
16	一究妙竟大姉	元禄2	1689	8月20日	○	G4-88	尖頂方形	
17	寿盛妙長大姉	享保8	1723	8月初10日	○			
18	花台寿蓮大姉	天明8	1788	7月21日	○	G4-61	舟形	地蔵立像
19	賢応寿保大姉	寛政12	1800	4月28日	○			
20	釈妙証信尼	文化3	1806	11月10日	○	G4-84	舟形	地蔵立像
21	真安妙光信女	元禄11	1698	10月15日	○	G4-59	尖頂方形	
22	得法妙歓大姉	正徳4	1714	2月15日	○	G4-60 「妙観」	尖頂方形	
23	朗月清光大姉	享保17	1732	10月12日	○	G4-58	尖頂方形	
24	青光童女	安永6	1777	3月8日	○			
25	花林妙香信女	宝暦2	1752	10月17日	○			
26	春山清空信士	宝暦4	1754	2月23日	○	G4-62	尖頂方形	
27	夏月童女	安永7	1778	10月5日	○			
28	慈光明真大姉	文政10	1827	閏6月19日		G4-76	舟形	大日如来坐像
29	賢空海童子	寛政12	1800	4月28日				

記号・番号は、立山町教育委員会2012による　　種別は池上2007による

以上により修正を行なった、最終形での位牌内容は、**表7**になる。

③考察

A 坊家について　佐伯家は、岩峅寺円城坊の後裔である。龍高寺によれば、同家は明治以降に龍高寺檀家になっているが、同寺過去帳には、17世紀中頃から18世紀後半までの一時期円城坊関係者が龍高寺と関係をもっていた痕跡がある。いずれも住職ではなく、大姉・童子等であることから、円城坊自体との関係が築かれたわけではなく、円城坊に嫁いできた女性における事情等一時的な関係であったと推定される。また、岩峅寺坊家の子女は、龍高寺において葬送を行なうという取り決めがなされていたともいい、そのような形態の一つとも理解される。

円城坊の成立についてみると、天正11（1583）年佐々成政発給文書にみる23坊中にその名は見えない。延宝5（1677）年「岩峅寺高物成」に円城坊が見える。したがって、本坊の成立は、天正11年以後延宝5年までの間といえる。

一方、延宝3年「越中立山由来御尋」〔『温故集録』〕に「今程ハ六十六社二十四坊ニ而御祈祷勤申候」、寛文8（1668）年「立山岩峅寺制札」〔『国事雑抄』〕に、「・　立山岩峅寺別当　二十四坊」とあり、この坊数が以後変化のないことから、その成立を寛文8年以前まで遡ることが可能である。

また、貞享3（1686）年「立山寄附券記」〔『越中立山古文書』138号文書〕では、常住坊・一乗坊・円城坊の3坊が他の衆徒と別に先に書かれており、常住坊は院主と考えられるため、円城坊は、長吏・座主・本願などのいずれかの役僧であったと考えられる。

B 祖師について

本寺位牌に掲載された祖師 4 人（四祖）については、先に『立山寺院主世代記帳』に基づきその関係を見たのであるが、『立山寺院主世代記帳』において四祖の序列が、栗勢→慈朝→慈興→慈範となっているのに対し、本寺位牌では、慈範→栗勢→慈朝→慈興と変化している。本寺位牌の記載順序は3段目以下ではすべて右→左となっており、祖師の壇だけが違った順序ということは考えにくいので、わざわざ慈範を筆頭にもってきたということに何か意図があるのであろう。

四祖の位号については、慈朝が和尚、その他の 3 人は上人であり、異なる。『立山寺院主世代記帳』では、慈朝が大和尚、その他の 3 人は大上人、『当山院主世代記写巻全』（寛政 3 年）では慈朝が大和尚、その他の 3 人は大聖人であり、いずれも慈朝の位号を別に取扱う立場が共通している。この傾向は、安田良栄氏が「立山人縁起（解読文体）」として報告された資料〔安田 1999〕中において、慈朝のみを大和上と表記している点と共通性が認められる。これにより、本寺位牌や『立山寺院主世代記帳』等において慈朝のみに異なる位号を付す形は、立山大縁起に起因する可能性がある（安田良栄氏のご教示による）。

④まとめ　岩峅寺二十四坊家において、このような先祖寺位牌を確認したのは初である。この寺位牌は、文政年間に何らかの契機により作成され、当初は墨書であったが、後に漆書に変更された。文政 10 年以後、円城坊においてこの位牌に追記されることはなかった。この理由は不明である。その後大正～昭和期に円城坊後継者の佐伯家は龍高寺檀家となり、その際この寺位牌を龍高寺に預けた。以上のような経緯により現在まで継承された。貴重な資料といえよう。

注

1　正徳 4(1714)年良尊作、岩峅雄山神社文書

2　寛政 3 年作。岩峅雄山神社文書。前書において、『立山寺院主世代記帳』以前に正和 2（1313）年海弁法師が書写した古記が存在し、それを良尊が「再書」したものが『立山寺院主世代記帳』と解説する。

梵字アク（墨書）		慈範上人 四月二一日	梵字■（墨書）（キリークか）	薬勢上人	梵字バン（墨書）	慈朝和尚	梵字ウン（墨書）	和銅七甲寅年 慈興上人 六月十四日	梵字タラーク（墨書）	権大僧都法印弘慶 慶安三天 十二月十五日	権大僧都円学 元禄四未年 六月十五日	権大僧都弘清 元禄十一年 七月十七日	権大僧都法印栄心 正徳二天 正月十四日	権大僧都法印秀玄 宝永四天 七月十八日	院主権大僧都法印秀清 宝暦四年 二月三日	権大僧都栄歓 宝暦元年 三月二十五日	権大僧都栄光 安永八年 正月五日
												権大僧都秀遍 文化八未年 七月十七日	権大僧都法印栄充 文政二天 正				
				寿盛妙長大姉 享保八卯年 八月初十日		花台寿蓮大姉 天明八年 七月二十一日		賢応寿保大姉 寛政十二年 四月二十八日	釈妙証信尼 文三 寅十一月十日	栄珊禅定尼 承応三天 八月十五日	一究妙竟大姉 元禄二巳天 八月二十日						
				朗月清光大姉 享保十七天 月十二日		青光童女 安永七年 王三月八日		花林妙香信女 宝暦二申天 十月十七日	春山清空信士 宝暦四戊年 一月二十三日	貞安妙光信女 月十五日	得法妙歓大姉 正徳四天 二月十五日						
				賢空海童子 寛政十一年 四月二十八日						夏月童女 安永七年 十月五日	慈光明真大姉 文政十年 王六月十九日						

表２　位牌札板面漆書文字　（１段目は墨書）

梵字タラーク	梵字ウン	梵字バン	梵字■（キリークか）	梵字アク
	慈興上人 六月十四日	慈朝和尚 和銅七甲寅年	薬勢上人	慈範上人 四月二二日	
院主権大僧都法印秀清 宝暦四甲戌年 二月三日	権大僧都法印秀玄 七月十八日 宝永四丁亥天	権大僧都法印栄心 正月十四日 正徳二壬辰天	権大僧都弘清 七月十七日 元禄十一戊寅年	権大僧都円学 六月十五日 元禄四辛未年	権大僧都法印弘慶 十二月十五日 慶安三庚虎天
		権大僧都法印栄充 正月二十日 文政二己卯天	権大僧都秀遍 七月十七日 文化八辛未年	権大僧都栄光 正月初五日 安永八己亥天	権大僧都栄歓 三月一十五日 宝暦元辛未年
釈妙証信尼 文化三丙寅年 十一月十日	賢応寿保大姉 四月二十八日 寛政十二年	花台寿蓮大姉 七月二十一日 天明八年	寿盛妙長大姉 八月初十日 享保八癸卯年	一究妙竟大姉 八月一十日 元禄二己巳天	栄珊禅定尼 八月十五日 承応三甲午天
春山清空信士 二月二十三日 宝暦四申戊年	花林妙香信女 十月十七日 宝暦一壬申天	青光童女 西王三月八日 安永六丁年	朗月清光大姉 十月十二日 享保十七壬子天	得法妙歓大姉 二月十五日 正徳四甲午天	貞安妙光信女 十月十五日 元禄十一戊寅天
					夏月童女 十月五日 安永七年

表３　位牌札板面墨書文字

梵字タラーク（墨書）	梵字ウン（墨書）		梵字バン（墨書）		梵字■（墨書）（キリーク か）		梵字アク（墨書）										
	慈興上人	和銅七甲寅年 六月十四日	慈朝和尚		薬勢上人		慈範上人	四月二二日		権大僧都法印弘慶	慶安三庚虎天 十二月十五日	権大僧都円学	元禄四辛未年 六月十五日	権大僧都栄歓	宝暦元辛未年 三月二十五日	権大僧都栄光	安永八己亥天 正月初五日
院主権大僧都法印秀清	権大僧都法印秀玄	宝永四丁亥天 七月十八日	権大僧都法印栄心	正徳二壬辰天 正月十四日	権大僧都弘清	元禄十一戊寅年 七月十七日	権大僧都秀遍	文化八辛未年 七月十七日	権大僧都法印栄充	文政二己卯天 正月二十日	栄珊禅定尼	承応二甲午天 八月十五日	一究妙竟大姉	元禄二己巳天 八月二十日	貞安妙光信女	元禄十一戊寅天 十月十五日	夏月童女
宝暦四甲戌年 二月一日	賢寿保大姉	寛政十二年 四月二十八日	花台寿蓮大姉	天明八年 七月二十一日	寿盛妙長大姉	享保八癸卯年 八月初十日	得法妙歓大姉	正徳四甲午天 二月十五日	青光童女	安永六丁年 酉三月八日	朗月清光大姉	享保十七壬子天 十月十二日	慈光明真大姉	文政十年 王六月十九日	賢空海童子	寛政十二年 四月二十八日	安永七年 十月五日
文化三丙寅年 十一月十日	花林妙香信女	宝暦二壬申天 十月十七日	春山清空信士	宝暦四甲戌年 二月二十三日													

表４　位牌札板面文字（漆書・墨書合成）

梵字タラーク（墨書）	梵字ウン（墨書）	梵字バン（墨書）	梵字■（墨書）（キリークか）	梵字アク（墨書）
	和銅七甲寅年 慈興上人 六月十四日	慈朝和尚	薬勢上人	慈範上人 四月二二日
宝暦四甲戌年 院主権大僧都法印秀清 一月三日	宝永四丁亥天 権大僧都法印秀玄 七月十八日	正徳二壬辰天 権大僧都法印栄心 正月十四日	元禄十一戊寅年 権大僧都弘清 七月十七日	元禄四辛未年 権少僧都円学 六月十五日
		文政二己卯天 権大僧都法印栄充 正月十日	文化八辛未年 権大僧都秀遍 七月十七日	安永八己亥天 権大僧都栄光 正月初五日
文化二丙寅年 釈妙証信尼 十一月十日	寛政十二年 賢応寿保大姉 四月二十八日	天明八年 花台寿蓮大姉 七月二十一日	享保八癸卯年 寿盛妙長大姉 八月初十日	元禄二己巳天 一究妙竟大姉 八月二十日
宝暦四申戌年 春山清空信士 二月二十三日	宝暦二壬申天 花林妙香信女 十月十七日	安永六丁年 青光童女 酉壬三月八日	享保十七壬子天 朗月清光大姉 十月十二日	正徳四甲午天 得法妙歓大姉 二月十五日
			寛政十二年 賢空海童子 四月二十八日	文政十年 慈光明真大姉 壬六月十九日

梵字アク（墨書）
慶安三庚虎天 権大僧都法印弘慶 十二月十四日
宝暦元辛未年 権大僧都栄観 二月二十五日
承応三甲午天 栄珊禅定尼 八月十五日
元禄十一戊寅天 貞安妙光信女 十月十五日
安永七年 夏月童女 十月五日

表7　位牌札板面文字（修正後）

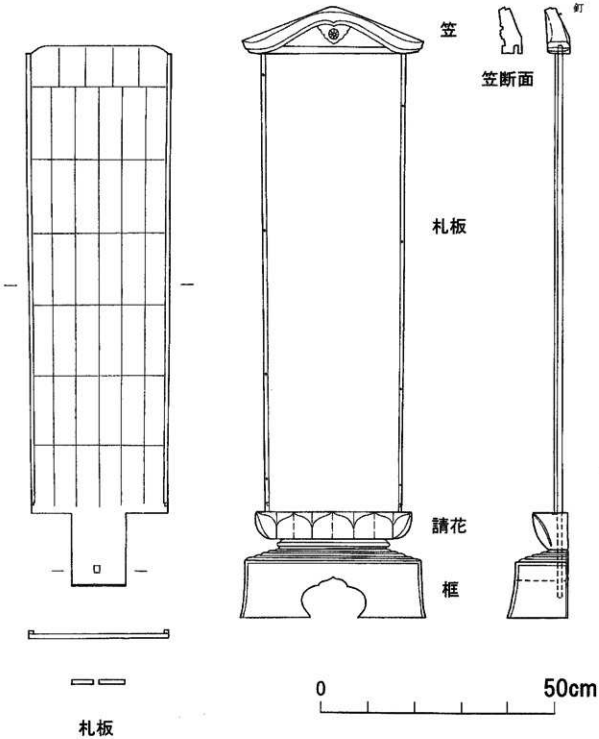
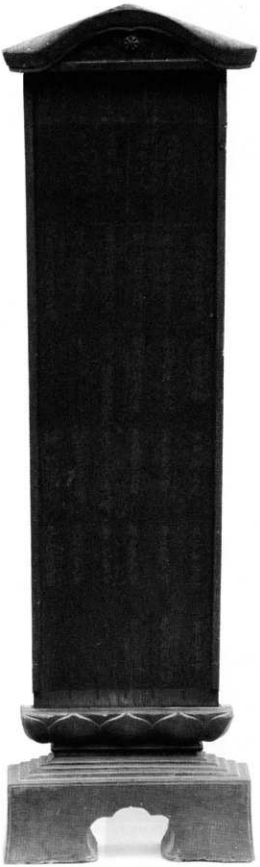


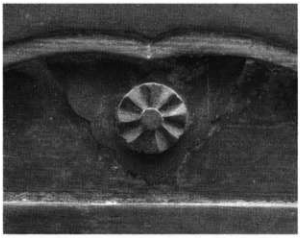
図１　佐伯家位牌　実測図



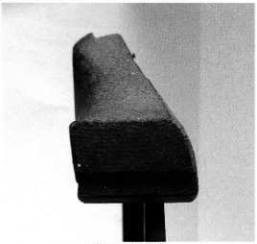
位牌正面全体

札板

笠　正面から



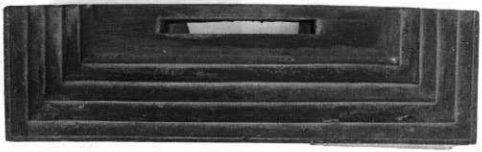
紋と下魚



笠　右横から

笠　裏面から

請花・框



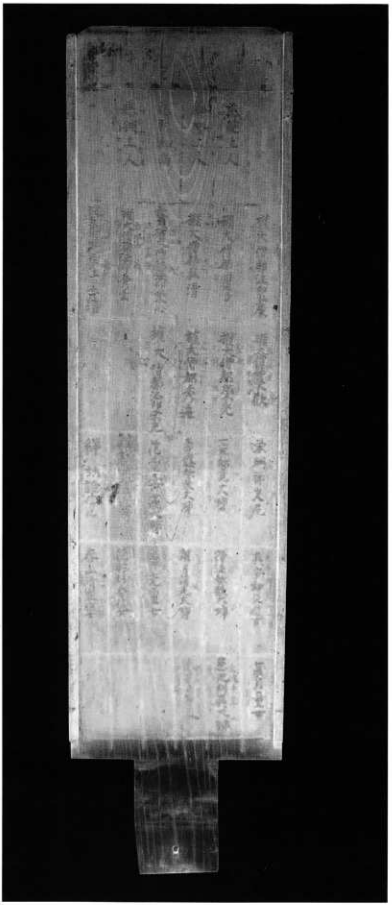
框　上面から

框　下面から

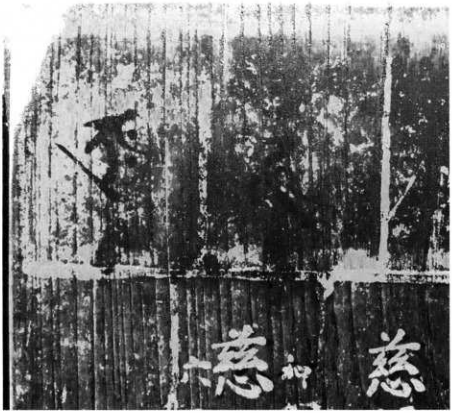
框　裏面から

円城坊寺位牌4

札板文字【写真加工】

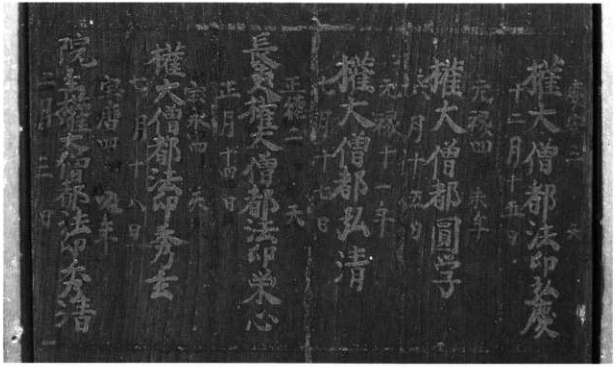


札板文字【写真加工】

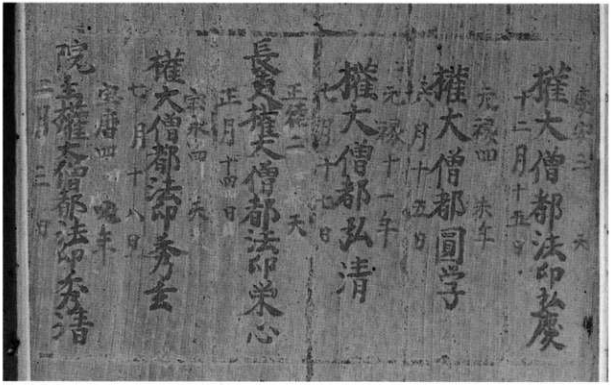


梵字部分【写真加工】

漆書下に見える墨書（部分）【写真加工】



漆書（部分）【写真加工】　明色で表示



漆書（部分）【写真加工】　濃色で表示

Ⅲ　総括

1　富山寺宝篋印塔旧塔について

現在塔基壇内部から出土した旧塔軸は、上段の反花の主弁に内側達磨形の彫込みを入れている。この彫込みは、安政５（1858）年以降明治末頃まで活躍した常願寺川石工牧喜右衛門が、文久２（1862）年以降石仏逮弁意匠に用いた特有のものとして認識された〔古川 2012a〕。これと同一の意匠が寛政５年造とみられる旧塔軸に見られることは、牧喜右衛門より約 70 年遡ることになり、牧の最初に創造した意匠ではないことが明らかである。

旧塔の作成が、富山町石工か常願寺川石工かの判断は容易ではないが、寛政５年以前における明確な常願寺川石工による宝篋印塔は未見であることに基づき、これを富山町石工の製作と推定した場合には、内側達磨形の彫込みを入れた逮弁の意匠は、富山町石工が発祥であると推定される。ただし、これを 14 年遡る安永８年製の大山大川寺末寺不動寺宝篋印塔は、石工銘はないが常願寺川石工製作の可能性があるため、断定には慎重である必要がある。突然発生的に牧喜右衛門において採用された意匠のルーツの解明に向けて解明の糸口が見つかったといえる。

2　宝篋印塔製作における常願寺川石工と富山町石工

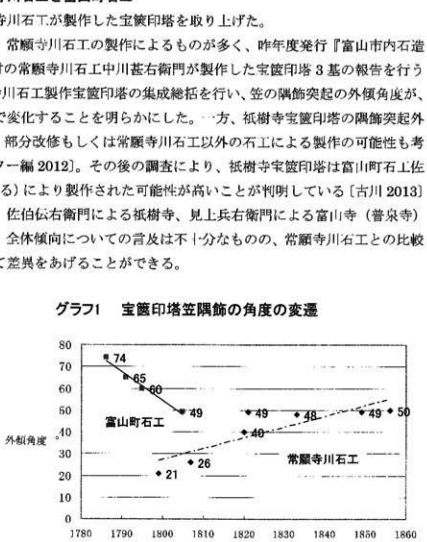
本書では、富山町石工と常願寺川石工が製作した宝篋印塔を取り上げた。

富山城下町周辺の宝篋印塔は、常願寺川石工の製作によるものが多く、昨年度発行『富山市内石造物等調査報告書』では、馬瀬口村の常願寺川石工中川甚右衛門が製作した宝篋印塔３基の報告を行うとともに、甚右衛門を含む常願寺川石工製作宝篋印塔の集成総括を行い、笠の隅飾突起の外傾角度が、時間の経過とともに一定の比率で変化することを明らかにした。一方、祇樹寺宝篋印塔の隅飾突起外傾角度は、これらとは一致せず、部分改修もしくは常願寺川石工以外の石工による製作の可能性も考えられた〔富山市教委埋文センター編 2012〕。その後の調査により、祇樹寺宝篋印塔は富山町石工佐伯伝右衛門（２代吉忠と推定される）により製作された可能性が高いことが判明している〔古川 2013〕

富山町石工による宝篋印塔は、佐伯伝右衛門による祇樹寺、見上兵右衛門による富山寺（普泉寺）の２基のみの調査成果であるが、全体傾向についての言及は不十分なものの、常願寺川石工との比較において、いくつかの点において差異をあげることができる。

第一は、笠の隅飾突起の外傾度とその年代的変化が異なる点である。富山町石工は、当初 74 度という大きな外傾であるが、次第に起きあがってくる〔古川 2013〕。一方常願寺川石工においては、当初 21 度のすぼまって立ったものが次第に外向きに広がっていく〔富山市教委埋文センター編 2012〕。両者の変化は全く反対の傾向を示している

グラフ1　宝篋印塔笠隅飾の角度の変遷



（グラフ 1）。このように見ると、後出の常願寺川石工は、開始時点から富山町石工の外反度の高い笠の意匠を受入れなかったことが読み取れる。

第二には、請花あるいは笠の縁取意匠が異なる点である。富山町石工は細く隆起した輪郭縁取を行ない、また蓮弁は無脈とする。常願寺川石工は縁取に意匠は施さず、蓮弁には弁脈を施す例が多い。弁脈がないものは周辺が肥厚する傾向にある。富山町石工作と推定される寛政11年富山船橋常夜灯（花崗岩製）2基にも同じ意匠がある〔古川 2010〕。

常楽寺宝篋印塔の相輪請花

第三には、基礎等の吉祥文の種類が異なる点である。両者に共通して採用される吉祥文様には、祥雲文・波涛文・波兎文がある。富山町石工は、このほか牡丹＋獅子狛犬、龍文を用いる。常願寺川石工では、龍文を用いた石工は幕末に北野其蔵ただ一人である。常願寺川石工が祥雲文・波涛文・波兎文にこだわったのに対し、富山町石工はそれ以外の文様も取り入れている。ただし、見上兵右衛門は波涛文のみの採用であり、相対的には種類数が集束していくのであろう。

祇樹寺宝篋印塔の相輪請花

以上のような相違については、概ね富山町石工が先行し、後に常願寺川石工が継承するといった先後関係において発生していることに留意しなければならず、単に石工集団の差異に帰すのは早計であろう。このような関係においては、先行する富山町石工工房において常願寺川石工が修業し、それを在郷において発展させる形で継承していったことが予測される。常願寺川石工においては、個々人の石工においても変容が認められており、資料が少ないとはいえ、富山町石工個人においても、変容や願主の注文など、変動要因の存在が推定されることから、その様態は一様ではないと思われる。

今後の資料の蓄積を待って再度検討を試みたい。

3　東薬寺蔵狛犬の年代について

東薬寺蔵狛犬の製作年代は、形態意匠の面から、これまで推定されていたように、鎌倉初期と理解するものが最も妥当と理解された。しかし放射性炭素測定年代は11世紀前半から12世紀中頃の平安後期の年代を示したことから、その年代にまで遡る可能性もあるとした。この年代については、本寺の本尊仏である木造不動明王坐像においても同様の状況が認められた。

この不動明王は、鎌倉初期の作とされ、後に平安末とする説が提示されていた。筆者らは、本寺に保管されていた不動明王修理時の木体木片の放射性炭素年代測定を行い、11世紀前半から12世紀中頃とする結果を得た。松浦正昭氏は、11世紀彫刻の要素が強く11世紀前半の年代を与えるべきとした〔松浦・古川ほか 2010〕。この年代は富山県上市町の大岩不動磨崖仏と同年代であり、従来の年代観の修正の必要が生じた。

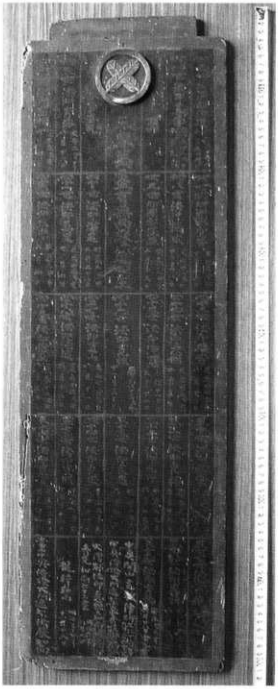
本狛犬の測定年代はこの不動明王の年代と合致している。これをもってただちに狛犬と不動明王坐像が同年代と判断する根拠としては乏しいのであるが、広島県厳島神社例のように、形態意匠による従来の年代観では鎌倉期と理解すべきところ平安期である例等の存在から、本寺狛犬の年代についても、不動明王坐像同様、測定年代を基準として見直す必要があると考えられる。

4　岩峅寺円城坊寺位牌について

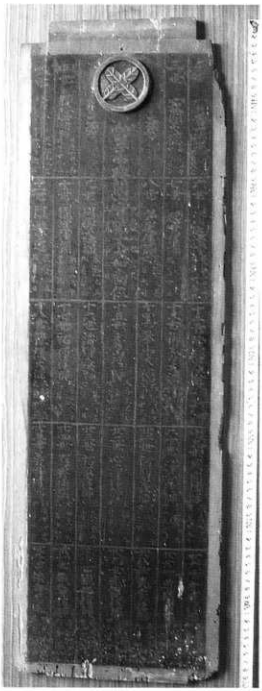
岩峅寺宿坊家は、江戸末までに 24 坊が存在したが、明治以降次第に衰退し、現在数坊の遺存を認めるのみである。そこにしても宿坊としての機能を失い、近世の宿坊家資料が残されているかどうかの実態も不明である。

このような中で、龍高寺に保管された円城坊寺位牌の存在は、立山町教育委員会において実施された石造物悉皆調査結果とともに、当時の宿坊家の情報を知る貴重な資料といえる。

龍高寺には、この円城坊寺位牌と類似した寺位牌 2 枚が存在する〔古川・蓮沼 2009〕。いずれも札板面のみが残る。原形は円城坊寺位牌と同じ形態の板位牌とみられる。これは龍高寺住職名を開基か



龍高寺寺位牌 2
（33 世～65 世）



龍高寺寺位牌 1

ら 65 世までを記載したもので、円城坊寺位牌のように、縦 6 本横 4 本の線で仕切って 35 区画とし、中央最上段に「丸に違い鷹の羽」の家紋を陽刻している。1 枚目には開基から 32 世までの位号・忌日、2 枚目には 33 世から 65 世の位号・忌日が漆で書かれている。1 枚目と 2 枚目の 59 世の位号までは同一人物の筆跡であるため、59 世秀教代の安永 2（1773）年以前寛保 3（1743）年以降にこの 2 枚を作成したことが推定される。その後別人により 65 世まで追記されているが、この追記はほぼ同一人物になるものであることから、末尾で忌日の記載がない 65 世法厳（忌日不明）が明治から大正にかけての時期に一括して追記を行ったものであろう。

真言宗寺院においても、このような寺位牌の存在は少なく、寺史解明の上でも貴重な資料といえる。

引用参考文献

【1，1－1，Ⅱ－1－2】

池上　悟　2007　『石造供養塔論攷』　ニューサイエンス社

石川県図書館協会編　1933　『図事雑抄』

井上鋭夫校訂　1974　『日本海文化叢書第1巻　加越能寺社由来　上巻』石川県図書館協会

上杉千郷　2001　『狛犬事典』戎光祥出版

太田郷土史編纂委員会　1987　『太田郷土史』

大村正之　1927　「大岩日石寺磨崖石仏」『富山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第8号

大山町史編纂委員会編　1960　『大山史稿』

金沢市玉川図書館近世史料館編　2003　金沢市図書館叢書(4)『温故集録』一

上市町誌編纂委員会編　1970　『上市町誌』

木倉豊信編　1962　『越中立山古文書』

京田良志　1970　『石燈籠新入門』誠文堂新光社

京田良志　1976　『富山文庫5　富山の石造美術』巧玄出版

京田良志　1988　「一乗谷の石仏・石塔」『笏谷石文化』福井の文化財を考える会

久保尚文　2008　『越中富山　山野川湊の中世史』桂書房

嶋本隆一・高野靖彦・前田一郎　2008　「安政大災害（1858）における加賀藩の災害情報と被災対応」『立山カルデラ研究紀要』第9号　立山カルデラ博物館

石造物研究会編　2012　『北陸の石造物—研究の現状と課題—』

続八尾町史編纂委員会　1973　『続八尾町史』

高瀬重雄監修　1994　『日本歴史地名大系第16巻　富山県の地名』平凡社

長島勝正・風間耕司　1975　『富山文庫8　越中の彫刻』巧玄社

日置謙校訂　1933　『越登賀三州志』石川県図書館協会

立山町教育委員会　1998　『越中立山岩峅寺文書集成目録』

立山町教育委員会　2012　『立山信仰宗教村落—岩峅寺—石造物等調査報告書』

富山県編　1980『富山県史　史料編二　近世上（加賀藩上）』

富山県　1987　『富山県史』史料編二　近世中　付録

富山県〔立山博物館〕編　1993　『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』

富山市教育委員会埋蔵文化財センター編　2012『富山市内石造物等調査報告書』

富山市郷土博物館編　2012『特別展　お殿さまとお寺—富山前田家ゆかりの寺々』展示図録

福江　充　1998　『立山信仰と立山曼荼羅—芦峅寺宗徒の勧進活動—』岩田書院

古川知明・伊集守道　2008　「医王山東薬寺の文化4年銘宝篋印塔下の埋納礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第27号　富山市考古資料館

古川知明・蓮沼優介　2009　「五穀山龍高寺宝篋印塔と礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第28号　富山市考古資料館

古川知明　2010　「富山船橋常夜灯について」『富山史壇』第161号　越中史壇会

古川知明・蓮沼優介　2011　「北叡山各願寺宝篋印塔調査報告」『富山市考古資料館紀要』第30号　富山市考古資料館

古川知明　2011a　「常願寺川石工甚右衛門について」『富山史壇』第164号　越中史壇会

古川知明　2011b　「常願寺川石工製作石仏研究の課題と展望」『北陸石仏の会研究紀要』10

古川知明　2011c　「神通川右工とその周辺—近世石工と在地石材—」『大境』第 30 号　富山考古学会
古川知明　2012a　「常願寺川右工牧喜右衛門について」『富山市考古資料館紀要』31
古川知明　2012b　「近世富山町右工について」『富山市の遺跡物語』13　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
古川知明　2012c　「常願寺川石工中嶋栄蔵について」『富山史壇』第 168 号　越中史壇会
古川知明　2012d　「富山県東部における近世石造物研究」『北陸の石造物—研究の現状と課題—』石造物研究会
古川知明　2012e　「常願寺川石工北野甚蔵について」『大境』第 32 号　富山考古学会
古川知明　2013　「富山町石工佐伯伝右衛門について」『富山市の遺跡物語』14　富山市教育委員会埋蔵文化財センター』
松浦正昭　古川知明　吉田生物研究所　パレオ・ラボ　2010　「医王山東薬寺木造不動明王坐像の年代測定分析について」『富山市考古資料館報』№47
安田良栄　1999　「立山大縁起のなりたちと他の立山諸縁起の特色について」『富山史壇』第 128 号　越中史壇会
八尾町史編纂委員会　1967　『八尾町史』
山元重男　2000　『立山本宮—立山信仰史に見るその変遷—』

【Ⅱ－１－２】

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
伊東隆夫,2002,仏像用材の樹種同定.高幡山金剛寺重要文化財木造不動明王及二童子像保存修理報告書,高幡山金剛寺,122-127,図版 131-140.
小原二郎,1964,日本彫刻用材調査資料.美術研究,229,74-83.
小原二郎,1972,木の文化.鹿島出版会,296p.
楽浪文化財修理所,2006,文化財修理報告書,vol.7,48p.
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

報告書抄録

ふりがな	とやましないせきぞうぶつとうちょうさほうこくしょ に
書名	富山市内石造物等調査報告書Ⅱ
副書名	
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	56
編著者名	
編集機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
編集機関所在地	〒930-0091　富山市愛宕町１丁目2-24　℡. 076-442-4246
発行年月日	西暦　2013年３月29日

所収文化財名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
近世石造物（さんせいせきぞうぶつ）	富山市内各所	16201				20120401～20130329		文化財調査

所収文化財名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
近世石造物	宝篋印塔	江戸			富山寺境内、日石寺境内
	石塔・手水鉢	江戸			宝憧寺関係
	燈籠	江戸			西光寺
近世木造彫刻	獅子狛犬	平安			東薬寺
	寺位牌	江戸			円城坊寺位牌（龍高寺保管）

要約

真言宗勝居山富山寺宝篋印塔解体に伴い、基壇内から旧塔軸部と藤石経が出土した。寛政５年造立の旧塔は天保２年本堂焼失、現在塔は弘化５年再建新造された。富山町石工見上兵右衛門の製作による。藤石経は697個が出土した。漢字・梵字種子の１字墨書が主体である。漢字は宝篋印陀羅尼経文の引用が主で、他に法華経がある。多字のもの３個に４人の戒名があり、供養者とみられるが、当寺過去帳と照合したところ旧塔造立以後の追加であることがわかった。

真言宗長柴山宝憧寺２世龍湖は、立山芦峅寺衆徒一山との関係が深く、立山芦峅寺園魔堂境内に文政13年阿字観碑を造立したほか、手水鉢２基を寄進した。いずれも常願寺川石工北野甚蔵の製作による。阿字観碑は龍湖死後、一山により墓碑に転用した。

真言宗大岩山日石寺宝篋印塔は、11世如龍が文政４年造立したもので、常願寺川石工中川甚右衛門が製作した。刻銘によれば常願寺川左岸の太田本江村・西番村等の住民が右取人足として協力し、加賀藩山廻役浮田善左衛門ほか村廻頭らが世話役となった経緯がわかる。

曹洞宗布金山西光寺燈籠は、明治３年まで同地に所在した旧大安寺境内にあったものと推定される。六角形燈籠に属し、年代は不明。火袋の菊花文浮彫が特徴的で、中台・基礎には、祥瑞文・波涼文が浮彫される。この文様は常願寺川石工の特徴で、中川甚右衛門作と推定される。

真言宗医王山東薬寺所蔵獅子狛犬一対は、平安後期の遺風様式を備えた優品である。本取・部材接合・修理状況を確認した。阿形本体から採取した木片により、樹種はモクレン属（推定ホオノキ）、年代は平安後期11世紀前半から12世紀中頃と判明した。本寺本尊不動明王坐像の年代に近いといえる。

真言宗五鈷山龍高寺には、立山岩峅寺宿坊円城坊の寺位牌が保管されている。高さ129cmの大型等付板位牌で、礼板表面は７段に仕切りされ、上段には５字の梵字種子の墨書、２～７段目には計29人の名が漆書される。２段目４人は立山開山の祖師、３・４段目10人は円城坊住職、５段目６人は住職率、以下10人は血縁者とみられる。下書の墨書は、文政２年まで認められ、文政10年以後にはないことから、漆書が行われたのはその間であろう。岩峅寺宿坊に寺位牌の存在を確認したのは初めてである。

富山市埋蔵文化財調査報告 56

富山市内石造物等調査報告書Ⅱ

発行日：2013（平成25）年3月29日
発　行：富山市教育委員会
編　集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町1丁目2番24号
ＴＥＬ：076-442-4246
ＦＡＸ：076-442-5810
Email：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷：前田印刷株式会社